

京都府改訂版レッドリスト2013

京 都 府

目 次

1	見直しの背景と調査結果の概要	P 1
2	調査対象	P 1
3	調査体制	P 2
4	京都府改訂版レッドリスト2013（野生生物）カテゴリー	P 4
5	京都府改訂版レッドリスト2013（野生生物）一覧表	P 5
6	各分類群のまとめ	
	哺乳類	P 6
	鳥類	P 8
	爬虫類	P 1 0
	両生類	P 1 1
	淡水魚類	P 1 3
	昆虫類・クモ類	P 1 5
	甲殻類およびその他の淡水産無脊椎動物	P 2 1
	陸産貝類	P 2 2
	淡水産貝類	P 2 4
	種子植物	P 2 6
	シダ植物	P 3 1
	コケ植物	P 3 4
	菌類	P 3 6
7	京都府レッドリスト 新旧カテゴリー対照表	P 3 9

京都府改訂版レッドリスト 2013

1 見直しの背景と調査結果の概要

平成 14 年に初版の京都府レッドデータブックを発刊して以来、10 年あまりが経過し、府内の自然環境や絶滅危惧種を取り巻く環境は大きく変化した。里地里山の放置や放棄水田の増加が更に進み、ニホンジカの急増で貴重な植生などが消失するほか、アライグマによるカスミサンショウウオなどの捕食、在来のオオサンショウウオとチュウゴクオオサンショウウオの交雑、外来魚が大部分を占める河川の増加などの外来生物による影響は特に顕著になってきている。この他にも園芸や飼育を目的とした採取や捕獲、開発等による生息生育環境の破壊による影響も依然として大きい。

平成 19 年には京都府絶滅のおそれのある野生生物の保全に関する条例が制定され、これまでに 25 種の野生生物が指定された。地域住民や保全団体の協働で熱心な保全活動がされているものも徐々に増えつつあるが、保全対象となっているものは府内で絶滅が危惧されている種の一部に過ぎず、まだ大きく改善しているとはいえない。

これらの状況も踏まえ、京都府レッドリストのうち野生生物編について、専門家の協力により平成 23 年度から 2 年間をかけ調査を行い、この程 10 年ぶりの改訂を行うこととなった。

前回 2002 年版では、動物 722 種、植物 803 種、菌類 72 種の計 1597 種が掲載されていたが、今回は動物 784 種、植物 996 種、菌類 92 種の計 1872 種と大幅にその種数を増やすことになった。カテゴリー別に見ると、前回 2002 年版が絶滅種 100 種、絶滅寸前種 393 種、絶滅危惧種 416 種であったが、今回は絶滅種 93 種、絶滅寸前種 459 種、絶滅危惧種 504 種となった。

これまで府内では既に絶滅したと思われていたコガタノゲンゴロウやフサタヌキモなどについて府民から寄せられた情報で再発見されたものがある一方、ベッコウトンボやオウミガイ、キブネゴケなど新たに府内での絶滅種とされたものもある。

平成 25 年度にはこれらの結果をもとに、地形地質、地域生態系も含めた京都府改訂版レッドデータブックや京都府の生物多様性地域戦略を取りまとめ、今後、保全対策の新たなステージに向けて、将来の府民に府内の伝統や文化に培われた生物多様性を伝えるための取組を進めて行くこととしている。

2 調査対象

(1) 対象分野

今回の改訂版リストでは、野生生物種のうち、次の分類群を対象とした。

【野生生物種】

1. 哺乳類、2. 鳥類、3. は虫類、4. 両生類、5. 淡水魚類、
6. 昆虫類[カゲロウ目、トンボ目、直翅(バッタ)目、革翅(ハサミムシ)目、カマキリ目、ゴキブリ目、半翅(カメムシ)目、脈翅(アミメカゲロウ)目、鞘翅(コウチュウ)目、シリアゲムシ目、双翅(ハエ)目、トビケラ目、鱗翅(チョウ)目、膜翅(ハチ)目]、7. クモ類、8. 甲殻類およびその他の淡水産無脊椎動物、9. 陸産貝類、10. 淡水産貝類、11. 種子植物、12. シダ植物、13. コケ植物、
14. 菌類[担子菌類、子のう菌類]

(2) 対象範囲

本調査の対象とする野生生物の範囲は、2002 年版と同様、陸産、淡水産及び陸域と密接な関係を持つ海岸域の生物のみとし、純海産の野生生物は除いた。

(3) 対象地域

本調査の対象とする地域は、京都府全域とした。

3 調査体制

◎指定希少野生生物保全検討委員会 委員

秋山 弘之	兵庫県立大学自然・環境科学研究所准教授
近藤 高貴	大阪教育大学教育学部教授
佐久間大輔	大阪市立自然史博物館主任学芸員
須川 恒	龍谷大学非常勤講師
竹門 康弘	京都大学防災研究所准教授
津軽 俊介	大本花明山植物園元園長
中村 桂子	日本野鳥の会京都副支部長
細谷 和海	近畿大学農学部教授
松井 正文	京都大学大学院人間・環境学研究科教授
光田 重幸	同志社大学理工学部准教授
村上 興正	京都府環境審議会自然・鳥獣保護部会部会長
吉安 裕	元京都府立大学大学院生命環境科学研究科教授

○分野別調査者

【ほ乳類】

村上 興正	京都精華大学
高柳 敦	京都大学大学院農学研究科
本川 雅治	京都大学総合博物館
前田喜四雄	奈良教育大学名誉教授
中川 尚史	京都大学大学院理学研究科

【鳥類】

須川 恒	龍谷大学非常勤講師・京都府環境審議会委員(全体総括)
中村 桂子	日本野鳥の会京都支部副支部長(京都市ほか担当)
(調査協力者)	
狩野 清貴	網野高校間人分校教員・日本鳥学会会員(北部担当)
梶田 学	日本鳥学会日本産鳥類記録委員会委員長(中部担当)
脇坂 英弥	環境学園専門学校講師・兵庫県立大学大学院生(南部担当)
和田 岳	大阪市立自然史博物館学芸員(全般)
塩崎 達也	京大野生生物研究会・名古屋大学大学院(情報集積)

【両生類・は虫類】

松井 正文	京都大学大学院人間・環境学研究科(全体総括)
田邊 真吾	日本爬虫両棲類学会会員
西川 完途	京都大学大学院人間・環境学研究科
疋田 努	京都大学大学院理学研究科
森 哲	京都大学大学院理学研究科
(調査協力者)	
関 慎太郎	京都水族館
見澤 康充	建設環境研究所
吉川 夏彦	京都大学大学院人間・環境学研究科
江頭幸士郎	京都大学大学院人間・環境学研究科

【淡水魚類】

細谷 和海 近畿大学農学部教授
東山 憲行 京都府教育委員会 総合教育センター北部研修所研究主事
林 博之 京都府立嵯峨野高等学校
辻野 寿彦 大阪市立三国中学校

(調査協力者)

川瀬 成吾 近畿大学大学院農学研究科
田中 和大 近畿大学農学部環境管理学科
須藤 允之 近畿大学農学部環境管理学科

【昆虫類・クモ類】

吉安 裕 日本鱗翅学会・元京都府立大学大学院教授
中尾 史郎 京都府立大学大学院生命環境科学研究科准教授
大石 久志 日本双翅目談話会、大阪市立自然史博物館外来研究員
水野 弘造 日本甲虫学会
田端 修 日本トンボ学会
沢田 佳久 元兵庫県立人と自然の博物館
松本吏樹郎 大阪市立自然史博物館
加村 隆英 追手門学院大学教授
吉田 真 立命館大学名誉教授

(調査協力者)

伊藤 建夫 日本甲虫学会
黒田 悠三 日本甲虫学会
蝦田 涉 丹後・丹波虫の会
小野 克己 日本鱗翅学会

【貝類】

近藤 高貴 大阪教育大学教育学部教授
中井 克樹 滋賀県立琵琶湖博物館専門学芸員
石田 未基 滋賀県立琵琶湖博物館

【甲殻類およびその他の淡水産無脊椎動物】

竹門 康弘 京都大学防災研究所准教授

【種子植物・シダ植物】

光田 重幸 同志社大学理工学部
赤松 富子 京都植物同好会会員
近藤 和男 京都植物同好会会員
田中 徹 京都植物同好会代表
津軽 俊介 前花明山植物園園長
細見 俊樹 京都植物同好会会員
山本 義則 京都植物同好会会員

(調査協力者)

西澤公男、松岡成久、水谷高典、村田 章、村田 源、湯川幸子
情報を提供して下さった皆様

【コケ植物】

秋山 弘之 兵庫県立大学自然・環境科学研究所准教授
 小林 亮平 京都市北区在住
 大崩 貴之 京都大学理学部
 道盛 正樹 特定非営利活動法人大阪自然史センター理事
 大石 善隆 信州大学農学部助教
 (調査協力者)
 田村 英子 岡山コケの会
 長谷川二郎 南九州大学理事長・学長

【菌類】

佐久間大輔 大阪市立自然史博物館主任学芸員
 今村 彰生 北海道教育大学准教授
 (調査協力者)
 丸山健一郎 関西菌類談話会
 小寺 祐三 関西菌類談話会
 上田 俊穂 関西菌類談話会
 森本 繁雄 関西菌類談話会
 名部みちよ 関西菌類談話会
 折原 貴道 神奈川県立生命の星・地球博物館

4 京都府改訂版レッドリスト2013(野生生物)カテゴリー

野生生物の分類群ごとの情報量や既存研究の蓄積の有無などの違いから、すべての分類群に当てはまるような明確な基準を作成することが困難であったため、改訂版のカテゴリーについても 2002 年版同様、基本的概念によりそれぞれ共通のカテゴリーを定め、具体的な選定の要件については、それぞれの分類群の実情に則して、最もふさわしいと考えられる基準により選定することとした。また、府内の野生生物の過去のデータについては不明な点が多く、それらと比較する定量的な基準は困難であったため、すべて定性的な基準により選定した。

なお、2002 年版では参考として、府内において生態系に特に悪影響を及ぼしていると考えられる種で、今後の動向を注目すべき外来種を、「要注目種－外来種」として掲載したが、その後、2007 年に府内における外来生物の被害実態などを取りまとめた「京都府外来生物データブック(京都府)」を発刊して詳述したため、改訂版では省いた。

京都府改訂版レッドリスト2013(野生生物)カテゴリー

区分	基本的概念
絶滅種	京都府内ではすでに絶滅したと考えられる種
絶滅寸前種	京都府内において絶滅の危機に瀕している種
絶滅危惧種	京都府内において絶滅の危機が増大している種
準絶滅危惧種	京都府内において存続基盤が脆弱な種
要注目種	京都府内の生息・生育状況について、今後の動向を注目すべき種および情報が不足している種

注) 種: 動物では種及び亜種、植物では種、亜種及び変種を示す。

5 京都府改訂版レッドリスト2013(野生生物)一覽表

	絶滅種	絶滅寸前種	絶滅危惧種	準絶滅危惧種	要注目種	計	△ アップ リスト	▽ ダウン リスト	○ 新規 掲載	● リスト 外 移行	☆ 和名 変更 等
ほ乳類	2種 (2種)	9種 (10種)	6種 (4種)	7種 (5種)	3種 (4種)	27種 (25種)	3種	4種	3種	1種	0種
鳥類	0種 (0種)	8種 (8種)	48種 (49種)	50種 (45種)	2種 (2種)	108種 (104種)	2種	5種	9種	5種	0種
は虫類	0種 (0種)	0種 (0種)	0種 (0種)	2種 (1種)	10種 (11種)	12種 (12種)	1種	0種	1種	1種	4種
両生類	0種 (0種)	4種 (3種)	1種 (2種)	3種 (2種)	11種 (12種)	19種 (19種)	2種	0種	0種	0種	1種
淡水魚類	3種 (2種)	13種 (11種)	14種 (13種)	6種 (5種)	8種 (9種)	44種 (40種)	1種	0種	5種	1種	6種
昆虫類	25種 (24種)	87種 (84種)	110種 (104種)	69種 (62種)	198種 (174種)	489種 (448種)	10種	11種	45種	4種	0種
クモ類	0種 (0種)	0種 (0種)	5種 (6種)	3種 (3種)	2種 (2種)	10種 (9種)	0種	0種	2種	1種	0種
甲殻類	1種 (0種)	0種 (1種)	1種 (0種)	2種 (3種)	2種 (1種)	6種 (5種)	2種	1種	2種	1種	0種
陸産貝類	0種 (0種)	4種 (1種)	8種 (10種)	16種 (9種)	16種 (22種)	44種 (42種)	11種	0種	2種	0種	0種
淡水産貝類	5種 (0種)	9種 (5種)	5種 (9種)	4種 (3種)	2種 (1種)	25種 (18種)	12種	0種	7種	0種	0種
種子植物	45種 (62種)	217種 (157種)	222種 (142種)	180種 (142種)	75種 (54種)	739種 (557種)	50種	26種	188種	6種	3種
シダ植物	5種 (5種)	34種 (27種)	33種 (30種)	17種 (13種)	30種 (33種)	119種 (108種)	7種	1種	11種	0種	0種
コケ植物	4種 (0種)	44種 (53種)	46種 (47種)	36種 (35種)	8種 (3種)	138種 (138種)	6種	5種	6種	6種	0種
菌類	3種 (5種)	30種 (33種)	5種 (0種)	27種 (25種)	27種 (9種)	92種 (72種)	1種	13種	27種	7種	0種
計	93種 (100種)	459種 (393種)	504種 (416種)	422種 (353種)	394種 (335種)	1,872種 (1,597種)	108種	66種	308種	33種	14種

6 各分類群のまとめ

ほ 乳 類

1 レッドリスト見直しで明らかになった点

(前回のレッドリストとの変更点)

1. 今回は従来の要注目種から要注目外来種を除外したこと
2. 評価対象種は、京都府で確認された種を対象としたこと(前回は要注目種に今後分布する可能性の高い種を入れていたが、今回は省いた。)

以上1と2の変更は要注目種をレッドリストの4番目のランクとして位置づけしようとしたことによる

3. 京都府確認種については、環境省第三次リストに準じて亜種名がつけられている種は亜種名を用いたこと

京都府で確認された哺乳類のうち、在来種の種数は前回6目16科36種であったが、今回は、前回は要注目種に入れていたモモジロコウモリとユビナガコウモリが確認された結果、6目16科38種となった。このうち、絶滅のおそれのある種(括弧内は前回種数)は、絶滅種2種(2種)、絶滅寸前種9種(10種)、絶滅危惧種6種(4種)、準絶滅危惧種7種(5種)、要注目種3種(4種)となり、総数は、27種(25種)となり2種増加した。これは評価対象種38種中(36種)27種(25種)で71%となり前回(69%)より2%増加し、大半の種で絶滅のおそれの生じていることが判明した。

2 注目される種のカテゴリー(ランク)と変更理由

前回からランクが同じ種については記述をせず、変更した種についてランク別に下記する。

【絶滅寸前種】:ミズラモグラとコキクガシラコウモリの2種を絶滅寸前種から絶滅危惧種にランクを下げたが、これは両種の生息確認が前回より増加しことによる。一方、ニホンカモシカは前回準絶滅危惧種であったが、今回は絶滅寸前種にランクを上げた。これはシカの影響によるものと思われるが、分布の確認状況が一段と厳しい状態となったためである。また、前回分布する可能性が高い種として、要注目種に入れていたユビナガコウモリが新たに絶滅寸前種にランク付けされた。

【絶滅危惧種】:上記のミズラモグラとコキクガシラコウモリの2種が入ったことと、前回、絶滅危惧種のホンシュウトガリネズミを要注目種にランクを下げた。これはこの記録の標本が無く、その後の調査でも確認されず情報の再確認が必要となったことによる。また、前回は分布している可能性が高い種として、要注目種にしていたモモジロコウモリが確認され、これが絶滅危惧種に入れられたことが変更点である。

【準絶滅危惧種】:前回、絶滅寸前種であったキクガシラコウモリの新たな生息地が見つかり、準絶滅危惧種にランクを下げた。また、前回リスト外であったサイゴクジネズミとハタネズミを準絶滅危惧種にランク付けした。サイゴクジネズミはシカによる下層植生の衰退、ハタネズミに関しては、主な生息地であった桂川や三川合流点での河川開発や樹林化や多年生草本が増加したこと、休耕地が減少したことなどが原因である。

【要注目種】:今回は要注目外来種および未確認であるウサギコウモリを除外したこと、上述したホンシュウトガリネズミを要注目種にランク下げたこと、およびホンドキツネをリスト外からこのカテゴリに加えた。これは河川におけるホンドキツネの確認状況が大幅に減少したことや人家周辺部での確認が激減したことによる。

3. 改訂版レッドリスト

〈 ほ乳類 27種 〉

絶滅種(2種)

ニホンオオカミ、ニホンカワウソ

絶滅寸前種(9種)

△ユビナガコウモリ、クロホオヒゲコウモリ、ヤマコウモリ、ヒナコウモリ、テングコウモリ、コテングコウモリ、オヒキコウモリ、ツキノワグマ、△カモシカ

絶滅危惧種(6種)

カワネズミ、▽ミズラモグラ、▽コキクガシラコウモリ、△モモジロコウモリ、ホンドモモンガ、ヤマネ

準絶滅危惧種(7種)

アズマモグラ、○サイゴクジネズミ、▽キクガシラコウモリ、ムササビ、スミスネズミ、ホンシュウカヤネズミ、○ハタネズミ

要注目種(3種)

▽ホンシュウトガリネズミ、ホンドザル、○ホンドキツネ

凡 例

- | |
|------------|
| △:アップリスト種 |
| ▽:ダウンリスト種 |
| ○:新規掲載された種 |
| ☆:種名などの変更 |

1 レッドリスト見直しで明らかになった点

今回の改定では鳥類は 108 種がレッドリストに掲載された。

希少カテゴリー別の種数は(()内は 2002 年における種数)、絶滅寸前種が 8 種(8 種)、絶滅危惧種が 48 種(49 種)、準絶滅危惧種が 50 種(45 種)、要注目種が 2 種(2 種)、計 108 種であった。

京都府では現在 343 種が記録され、このうち 31.5%の 108 種がレッドリストに掲載された。2002 年では京都府で 321 種が記録されており、32.4%の 104 種がレッドデータブックに掲載されていた。京都府で記録される鳥種の約3割が、何らかの希少性の指摘がされ保護する必要があるという状況に変化はない。

生息環境別に種数を見ると(()内は 2002 年における種数)、海域・海岸域・離島が 17 種(13 種)、河川・池沼・ヨシ原が 17 種(14 種)、水田・畑地・草地在 31 種(30 種)、山地・山林が 40 種(43 種)、都市緑地など他の環境が3種(3 種)、計 108 種であった。基本的なパターンは変わっておらず、府内の山地・山林などの森林環境とともに、海岸域や河川、水田などの湿地環境が鳥類の生息環境として重要であることが、あらためて確認された。

2 注目される種のカテゴリー(ランク)と変更理由

3種(チョウゲンボウ、コウノトリ、マミジロ) は府内であらたに繁殖が確認された。チョウゲンボウは京都市内で、コウノトリは京丹後市で繁殖を開始し、マミジロは芦生(南丹市)で繁殖情報が得られた。いずれも極めて少数の繁殖個体群であることから、チョウゲンボウは準絶滅危惧種(越冬個体群)から、コウノトリはリスト外(迷行種)から、マミジロは準絶滅危惧種(通過個体群)から絶滅危惧種となった。コウノトリは、兵庫県豊岡市における個体群復元事業により隣接する京丹後市でも少数個体が周辺生息するようになり 2012 年に営巣を開始した。

コウノトリ (旧)リスト外(迷行種) → (新)絶滅危惧種(繁殖個体群)

コウノトリはリスト外(亀岡市で半年近く滞在していたこともあるが迷行種扱い)であったが、兵庫県豊岡市における個体群復元事業により隣接する京丹後市でも少数個体が周辺生息するようになり 2012 年に営巣を開始し、極めて少数の繁殖個体群なので絶滅危惧種となった。

チョウゲンボウ (旧)準絶滅危惧種(越冬個体群) → (新)絶滅危惧種(繁殖個体群)

チョウゲンボウは準絶滅危惧種(越冬個体数は少ないが、近年減少はしていない越冬個体群)であったが、京都市内で営巣を開始し、繁殖個体群の規模は極めて小さい状況であるので、絶滅危惧種とランクアップした。

オンドリ、アオバト、コルリ、ジュウイチ、キバシリは、2002 年の情報よりは観察記録があることから、絶滅危惧種から準絶滅種となった。イワツバメとタカブシギは、観察結果(減少はしていないし、少なくともはない)からレッドリストからははずした。さらに、オオマシコ、コイカル、ホシガラスもレッドリストからははずした。これらの種は定期的に特定の地域に渡来する可能性がない迷行種と判断しなおしたためである。

本来 2002 年時点で、対象種として検討すべきだったがもれていてリスト外となっていた種で、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、ヒメウ、タゲリは、準絶滅危惧種(越冬個体群)となった。クロガモも対象種の検討からもれていたが、京都府だけでなく周辺県の海岸域における越冬期の調査でほとんど確認

されておらず、絶滅危惧種(越冬個体群)となった。

クロガモ (旧)リスト外 → (新)絶滅危惧種(越冬個体群)

クロガモは2002年時点で対象種として検討すべき種であったが検討から漏れていた。クロガモは京都府だけでなく周辺県の海岸域における越冬期の調査でほとんど確認されておらず、越冬個体群の規模が極めて小さいことから絶滅危惧種となった。

3. 改訂版レッドリスト

〈 鳥類 108種 〉

絶滅寸前種(8種)

ミゾゴイ、イヌワシ、オオハクチョウ、ウズラ、カンムリウミスズメ、カラスバト、コノハズク、ブッポウソウ

絶滅危惧種(48種)

ヒメクロウミツバメ、ヨシゴイ、クロサギ、○コウノトリ、○クロガモ、ミサゴ、ハチクマ、オジロワシ、オオタカ、ツミ、サシバ、クマタカ、ハイイロチュウヒ、チュウヒ、ハヤブサ、△チョウゲンボウ、コチョウゲンボウ、クイナ、ヒクイナ、タマシギ、シロチドリ、トウネン、ヒバリシギ、オジロトウネン、ツルシギ、コアオアシシギ、ソリハシシギ、オグロシギ、オオソリハシシギ、ホウロクシギ、ヤマシギ、ハリオシギ、アオシギ、ツバメチドリ、コアジサシ、トラフズク、コミミズク、オオコノハズク、ヨタカ、ヒメアマツバメ、ヤマセミ、アカショウビン、オオアカゲラ、サンショウクイ、△マミジロ、コサメビタキ、クロジ、コムクドリ

準絶滅危惧種(50種)

カイツブリ、○ヒメウ、ササゴイ、チュウサギ、コハクチョウ、▽オシドリ、トモエガモ、シマアジ、シノリガモ、○ホオジロガモ、○ミコアイサ、○カワアイサ、ハイタカ、ノスリ、チゴハヤブサ、ヤマドリ、オオバン、イカルチドリ、○タゲリ、ムナグロ、ウズラシギ、アオアシシギ、クサシギ、キアシシギ、イソシギ、○ハマシギ、チュウシャクシギ、チュウジシギ、オオジシギ、セイタカシギ、▽アオバト、▽ジュウイチ、カッコウ、ツツドリ、アオバズク、フクロウ、アリスイ、アカゲラ、トラツグミ、クロツグミ、▽コルリ、ムギマキ、サンコウチョウ、ゴジュウカラ、○ツリスガラ、▽キバシリ、ハギマシコ、イスカ、コクマルガラス、オオハム

要注目種(2種)

オオミズナギドリ、ウミネコ

凡 例

- | |
|------------|
| △:アップリスト種 |
| ▽:ダウンリスト種 |
| ○:新規掲載された種 |
| ☆:種名などの変更 |

1. レッドリスト見直しで明らかになった点

この改定でレッドリストに掲載された爬虫類は 13 種である。希少カテゴリー別の種数は 2002 年においては、準絶滅危惧種が 1 種、要注目種が 11 種(外来種を除く)の計 12 種であったが、今回の改訂で準絶滅危惧種が 2 種、要注目種が 11 種(外来種を除く)になったためである。

この改訂によって、2002 年時点で要注目種とされていたヤマカガシが準絶滅危惧種に変更され、また、リストに掲載されていなかったニホンイシガメが要注目種に加わった。後者の変更のため、京都府に現在定着している 15 種(外来種を除く)のうち、レッドリストに掲載されていないのはニホンヤモリとカナヘビのみになった。ヤマカガシとニホンイシガメを除くと、2002 年にレッドデータブックに掲載されていた種に関しては、その後、生息状況に大きな変化が認められないと判断されたため、ランクに変更はなかった。言い換えれば、京都府で記録される爬虫類の全種において、生息環境の改善は見られず、依然として保護の必要がある状況にある。

2. 注目される種のカテゴリー(ランク)と変更理由

ヤマカガシ (旧)要注目種 → (新)準絶滅危惧種

耕作の減少による水田環境の悪化に伴って餌となるカエル類など小動物の減少が続いており、また、生活に適切な微環境が消失して、各地で目撃数が少なり、特に低地では激減しているため、要注目種から準絶滅危惧種に変更した。

ニホンイシガメ (旧)リスト外 → (新)要注目種

里山の生息環境の悪化によって分布域が減少し、低地ではおそらく外来種ミシシippアカミガメの影響を受けて目撃数が減少しているため、新たに要注目種に加えた。

3. 改訂版レッドリスト

〈 爬虫類 12種 〉

準絶滅危惧種(2種)

☆ミナミイシガメ、△ヤマカガシ

要注目種(10種)

クサガメ、☆ニホンスッポン、☆ニホントカゲ、タカチホヘビ、シロマダラ、ジムグリ、アオダイショウ、ヒバカリ、☆ニホンマムシ、○ニホンイシガメ

凡 例

△: アップリスト種
▽: ダウンリスト種
○: 新規掲載された種
☆: 種名などの変更

1 レッドリスト見直しで明らかになった点

この改定でレッドリストに掲載された両生類は 19 種で、総種数は改訂前と同じである。しかし、その内訳には変更がある。希少カテゴリー別の種数は 2002 年においては、絶滅寸前種が 3 種、絶滅危惧種が 2 種、準絶滅危惧種が 2 種、要注目種が 12 種(外来種を除く)の計 19 種であったが、今回の改訂で絶滅寸前種が 4 種、絶滅危惧種が 1 種、準絶滅危惧種が 3 種、要注目種が 11 種(外来種を除く)となった。この改訂のなかで、2002 年時点で絶滅危惧種とされていたハコネサンショウウオが絶滅寸前種に、また、要注目種とされていたナガレタゴガエルが準絶滅危惧種に、カテゴリーが変更された。2002 年にレッドデータブックに掲載されていた種に関して、これら 2 種以外はその後、生息状況に大きな変化が認められないと判断されたため、ランクに変更はなかった。今回もレッドデータブックに掲載されなかったのは、ニホンアマガエルとタゴガエルだけであり、京都府で記録されている両生類の大多数で生息環境の改善は見られず、依然として保護が必要とされている。

2 注目される種のカテゴリー(ランク)と変更理由

ハコネサンショウウオ (旧)絶滅危惧種 → (新)絶滅寸前種

絶滅危惧種から絶滅寸前種への変更理由は、詳細な調査の結果、分布域が予想以上に局限されており、生息域の改変があればただちに局地絶滅する可能性が高いと判断されたためである。

ナガレタゴガエル (旧)要注目種 → (新)準絶滅危惧種

要注目種から準絶滅危惧種への変更も、分布が局限されることが大きな理由で、生息適地と予想される山間溪流の調査にもかかわらず新たな生息地を確認することができなかったためである。

3. 改訂版レッドリスト

〈両生類 19種〉

絶滅寸前種(4種)

カスミサンショウウオ、アベサンショウウオ、☆ナゴヤダルマガエル、△ハコネサンショウウオ

絶滅危惧種(1種)

オオサンショウウオ

準絶滅危惧種(3種)

ヒダサンショウウオ、ニホンヒキガエル、△ナガレタゴガエル

要注目種(11種)

イモリ、ナガレヒキガエル、アズマヒキガエル、ニホンアカガエル、ヤマアカガエル、トノサマガエル、ツチガエル、ヌマガエル、シュレーゲルアオガエル、カジカガエル、モリアオガエル衣笠山個体群

凡 例

- | |
|------------|
| △:アップリスト種 |
| ▽:ダウンリスト種 |
| ○:新規掲載された種 |
| ☆:種名などの変更 |

1 レッドリスト見直しで明らかになった点

魚類分類学の進展に伴い、従来同種と思われていたものの中には実は別種が含まれていたり、詳細調査がなされた結果、新種であることが判明し、淡水魚の保全目標が明確となった。従来、メダカは南北2集団からなる多様な種と考えられていたが、南日本集団はミナミメダカ *Oryzias latipes*、北日本集団はキタノメダカ *Oryzias sakaizumii* の2種に整理された。両種は日本列島において南北にすみ分けているが、分布の接触域に相当する京都府では両種は混在する。例えば由良川では上流域にミナミメダカが、下流域にキタノメダカが分布し、互いに交雑することなく独自の集団を維持している。

今回の京都府レッドリストにおける魚類の掲載種数やその構成に大幅な変更があるわけではないが、そのことは京都府内の水辺環境の悪化に歯止めがかかったことを意味しない。京都府の淡水魚多様性のホットスポットと言われる淀川水系では周辺水域を含め開発が進み、生息環境の人工化は加速している。加えてオオクチバスやブルーギルなどの外来魚による食害も大きい。そのため、イタセンパラ、アユモドキなどの指定希少野生動物か回復の兆しは見られず、ヨドゼゼラは激減、ヨドコガタスジシマドジョウの絶滅が確認されるなど、現況は予断を許さない状態である。

2 注目される種のカテゴリー(ランク)と変更理由

ヨドゼゼラ *Biwia yodoensis*

(旧)リスト外 → (新)準絶滅危惧種

従来、ゼゼラ *Biwia zezera* として扱われてきたが、別種であることが判明した。学名が示すように淀川水系の固有種で、かつてはワンドや氾濫原に広く分布していたが、生息地は大幅に減少し、現在では桂川、木津川などの一部の水域に局在している。

ヨドコガタスジシマドジョウ *Cobitis minamorii yodoensis*

(旧)絶滅寸前種 → (新)絶滅種

淀川水系固有の亜種で雑種起源の集団と考えられる。1970年代以降採集記録はなく、前回調査期(2002年)以降も生息は確認されず、絶滅したものと判断される。

3. 改訂版レッドリスト

〈 淡水魚類 44種 〉

絶滅種(3種)

ニッポンバラタナゴ、ミナミトミヨ、△ヨドコガタスジシマドジョウ

絶滅寸前種(13種)

カワバタモロコ、アブラハヤ、イチモンジタナゴ、イタセンパラ、ツチフキ、ナガレホトケドジョウ、
ウツセミカジカ(カジカ小卵型)、アユモドキ、☆チュウガタスジシマドジョウ、
☆サンヨウコガタスジシマドジョウ、アジメドジョウ【琵琶湖・淀川水系】、
☆タンゴスジシマドジョウ、ホトケドジョウ

絶滅危惧種(14種)

スナヤツメ、シラウオ、シロヒレタビラ、カネヒラ、カワヒガイ、ズナガニゴイ、ゼゼラ、アカザ、
☆キタノメダカ、☆ミナメダカ、オヤニラミ、ゴクラクハゼ(琵琶湖・淀川水系)、
カマキリ(アユカケ)、○カワヤツメ

準絶滅危惧種(6種)

ヤリタナゴ、アブラボテ、☆ヌمامツ、シモフリシマハゼ、シロウオ、○ヨドゼゼラ

要注目種(8種)

サケ、ニゴロブナ、ハス、ワタカ、スイゲンゼニタナゴ、ホンモロコ、デメモロコ、ビワコオオナマズ

凡 例

△:アップリスト種
▽:ダウンリスト種
○:新規掲載された種
☆:種名などの変更

1. レッドリスト見直しで明らかになった点

- (1) 昆虫類・クモ類の絶滅のおそれのある種の総数は、2002年のレッドリストでは、457種だったが、今回は499種(絶滅種: 25種、絶滅寸前種: 87種、絶滅危惧種: 115種、準絶滅危惧種: 72種、要注目種: 200種)となり、42種増加した(47種追加、5種除外または削除)。したがって、今回の見直しで昆虫・クモ類の生息状況が依然として改善されていないことが示されているほか、これまで情報が不足していた種について生息状況等の新たな知見が得られたことで評価が進んだといえる。
- (2) 今回の見直し調査で、注目されるランクの変更と追加は、水生昆虫類で多い傾向を示している。とくにトンボ目では3種を絶滅寸前種から絶滅種にした。このことは今世紀に入ってから、外来生物の影響も含めた湿地環境の保全と改善が進んでいないことを裏付けている。ほかのトンボ類も個体数と生息域の減少がみられ、合わせて14種を新たに要注目種に加えた。ほかに、絶滅が危惧される水域の昆虫として、イトアメンボ、オヨギカタビロアメンボ(今回初記録)、ミズアブ類、ミギワバエ等を新たにリストに加えたり、そのランクを上げた。
- (3) 海岸砂地やそれに続く草原では、近年全国的にも多くの昆虫の生息域の減少が報告され、京都府でも従来のリストを見直し、例えばハチ(膜翅)目ではシロスジコシブトハナバチ、ハナダカバチを新たにレッドリストに加えた。
- (4) 鞘翅(コウチュウ)目で絶滅種としていた2種、クビナガヨツボシゴミムシとコガタノゲンゴロウが今回新たに発見され、絶滅寸前種とした。今後これらの生息状況を注視していくとともに、生息地の保全策を講じる機会となった。しかし一方で、鞘翅(コウチュウ)目でも5種を新たにレッドリストに加え、全体としては環境の改善はすすんではない。
- (5) 昆虫類55種、クモ類2種について、新たにリストに追加あるいはランクが変更された。これらのランクの変更だけでなく、本調査の過程で、新たに発見された昆虫も多く、特に鞘翅(コウチュウ)目では前回のリスト作成以降に324種が新たに追加記録され、京都府産の甲虫類は合計3871種となった。

2. 注目される種のカテゴリー(ランク)と変更理由

ベッコウトンボ (旧)絶滅寸前種 → (新)絶滅種

京都府では唯一の生息地であった京都市深泥池で、1971 年を最後に、以降の数度の生息確認を目的とした調査にもかかわらず現在まで再発見できなかった。本種は環境省の希少生物に指定されており、生息していれば人目を引くトンボであるが、近年府内における目撃の報告もなく、また追跡調査でも確認できなかったため、今回、絶滅したと判断した。

トゲミケハラブトハナアブ (旧)リスト外 → (新)絶滅寸前種

マルハナバチに擬態する大形のハナアブ。幼虫は尾端に長い呼吸器を持ち、樹洞に溜まった水溜り中に生息する。分布記録が不明であったため評価が留保されていたが、その後整理されるにつれ、全国的に減少している実態が明らかとなった。1960 年代までは、本州各地で採集されており、京都では大文字山の記録もある。しかしその後、この種は全国的にもほとんど再発見の報告がない。減少の理由は不明であるが、他の近縁種よりもより自然度の高い森林に依存していた可能性がある。

チャマルチビヒョウタンゴミムシ (旧)要注目種 → (新)絶滅危惧種

ブナ帯の落葉腐植土から得られている種である。京都府における唯一の産地である宇治市天ヶ瀬でその後機会ある度に再確認を試みたが、追加できなかったため、ランクを上げて絶滅危惧種とした。

コガタノゲンゴロウ (旧)絶滅種 → (新)絶滅寸前種

かつては平地の池沼に普通に見られた種であった。本種は、前回のレッドリスト種の選定時に京都府においては 1930 年代以降記録がないので絶滅したと判断していたが、2009 年に南山城村の複数の池で少数ながら本種の生息が確認されたため、絶滅寸前種として扱うこととした。

ミズスマシ (旧)要注目種 → (新)絶滅危惧種

かつて全国の止水域に普通に見られた種であったが、近年全国で生息地が減少していることが報告されている。京都府でも 2003 年以降正式な記録がなく、また環境省の RD 第 4 次見直しでも新たに絶滅危惧 II 類に指定されたことを受け、絶滅危惧種とした。なお、他の流水性のミズスマシ類も減少傾向が報告され、これらの生息状況にも注視する必要がある。

ムツボシクモバチ(ムツボシベッコウ) (旧)絶滅危惧種 → (新)絶滅寸前種

本州に分布し、川原の砂地に生息するコモリグモ類を狩る特殊な生活様式をもつハチである。京都府では近年の記録がなく、また河川の川原の攪乱が進んでいる周辺の府県の状況からも本種の生息がきわめて危惧されると判断した。

3. 改訂版レッドリスト

〈 昆虫類 489種 〉

絶滅種(25種)

△マダラナニワトンボ、△オオキトンボ、△ベッコウトンボ、アカヘリミドリタマムシ、フタモンマルクビゴミムシ、キベリマルクビゴミムシ、クロマルクビゴミムシ、アシグロチビヒョウタンゴミムシ、アオヘリアオゴミムシ、ツヤキベリアオゴミムシ、アシグロアオゴミムシ、クビナガキベリアオゴミムシ、オオサカアオゴミムシ、アカアシナガクチキ、オオナガクチキ、スジゲンゴロウ、シャープゲンゴロウモドキ、ホソガムシ、ルリカミキリモドキ、ニセハムシハナカミキリ、ツマグロヒメハナカミキリ、ブチヒゲハナカミキリ、イガブチヒゲハナカミキリ、アサカミキリ、ウジセトビケラ、

絶滅寸前種(87種)

ヒヌマイトンボ、△ハネビロエゾトンボ、コバンムシ、カワムラナベブタムシ、○オヨギカタビロアメンボ、クロカタビロオサムシ、アキオサムシ、オオヒョウタンゴミムシ、△チャマルチビヒョウタンゴミムシ、カンムリメクラチビゴミムシ、ダイゴメクラチビゴミムシ、マホメクラチビゴミムシ、▽クビナガヨツボシゴミムシ、イズリハメクラチビゴミムシ、ムカシゲンゴロウ、ミウラメクラゲンゴロウ、オオイチモンジシマゲンゴロウ、▽コガタノゲンゴロウ、マダラシマゲンゴロウ、ナミゲンゴロウ、コオナガミズスマシ、○ヒョウタンメダカハネカクシ、○ルイスムネボソヨツメハネカクシ、ムネアカオオキバハネカクシ、メダカオオキバハネカクシ、タカハシセスジハネカクシ、ドウバネアナバケハネカクシ、オオチビマルハナノミ、マグソクワガタ、ヒメオオクワガタ、オオクワガタ、キョウトチビコブスジコガネ、ダイコクコガネ、シラホシダエンマルトゲムシ、ヤノコモンタマムシ、アオタマムシ、アサヒナリリナガタマムシ、ヘリアカカネコメツキ、クラマアカコメツキ、ヒゲナガクロコメツキ、ナルカワナガクシコメツキ、ケシチビマメコメツキ、アトキクロヒメジョウカイモドキ、マルヒラタケシキスイ、カタベニツツケシキスイ、ミツノオオケシキスイ、ムクゲネスイ、ムネビロネスイ、ミカドテントウ、クロジウニホシテントウ、クロヘリメツブテントウ、オオサカヒメテントウ、キムネキノコムシダマシ、ルリキノコムシダマシ、ヒメカツオガタナガクチキ、ヒゲブトナガクチキ、ナガヒラタホソカタムシ、シナスナゴミムシダマシ、キイロチビコクヌストモドキ、オオダイマゴソコガネダマシ、コモンキノコゴミムシダマシ、ヒサゴゴミムシダマシ、セコブナガキマワリ、ホソクビキマワリ、フタスジカタビロハナカミキリ、シコクヒメコブハナカミキリ、オオトラカミキリ、エゾトラカミキリ、キンイロネクイハムシ、ツヤネクイハムシ、カワシマケブカハムシ、カスミハネカ、ベッコウタマユラアブ(ベッコウクサアブ)、クロツヤタマヒラタアブ、ムツボシナガハナアブ、ムツボシベッコウハナアブ、カエルキンバエ、キタヤマカクスイトビケラ、オオウラギンヒョウモン、ヒメヒカゲ、ベニモンカラスシジミ、シルビアシジミ(シルビヤシジミ)、ヒメコミズメイガ、○トゲミケハラブトハナアブ、○スズキツリアブ、クチナガハバチ、△ムツボシクモバチ(ムツボシベッコウ)

絶滅危惧種(110種)

コバネアオイトトンボ、△アオヤンマ、ネアカヨシヤンマ、セグロイナゴ(セグロバツタ)、▽カワラバツタ、ヤマトバツタ(ヤマトマダラバツタ)、ハマスズ、ヒメミズカマキリ、エサキアメンボ、○イトアメンボ、タガメ、オオウスバカゲロウ、セアカオサムシ、イソチビゴミムシ、ルリケイメクラチビゴミムシ、ヨシイメクラチビゴミムシ、シマメクラチビゴミムシ、オゴソコメクラチビゴミムシ、ユゲメクラチビゴミムシ、サクライメクラチビゴミムシ、コスゲメクラチビゴミムシ、シュテンメクラチビゴミムシ、イグチケブカゴミムシ、

キボシチビコツブゲンゴロウ、ムモンチビコツブゲンゴロウ、ヤギマルケシゲンゴロウ、
 マルガタゲンゴロウ、クロゲンゴロウ、△ミズスマシ、クロエンマムシ、ババヒゲブトチビシデムシ、
 サツマヒゲブトチビシデムシ、ヤマトモンシデムシ、クチキクシヒゲムシ、ルリクワガタ、オニクワガタ、
 ○マルオクロコガネ、○オオキイロコガネ、ハバヒロナガハナノミダマシ、
 ミゾムネチビサビキコリ、シナノカネコメツキ、ホソアカツヤコメツキ、アカアシシモフリコメツキ、
 スズキシモフリコメツキ、ヤツモンシモフリコメツキ、クロホソキコメツキ、ムネアカクロコメツキ、
 ミヤコアラハダチャイロコメツキ、アシウアカコメツキ、ベツピンアカコメツキ、ミズノクロコメツキ、
 タカハチクロコメツキ、ヤマトクロコメツキ、アカグロコメツキ、ヒメオオナガコメツキ、
 ヒメクロナガコメツキ、チビマメコメツキ、ニセチビマメコメツキ、ホソマメコメツキ、
 チュウゼンジベニボタル、キイロシリブトジョウカイ、ベニオビジョウカイモドキ、
 ルリキオビジョウカイモドキ、ツマグロツツシンクイ、ヨツボシアカマルケシキスイ、
 ルリヒラタムシ、オオツカヒメテントウ、スエヒロタケツツキノコ、フタオビオオハナノミ、
 ムナコブハナカミキリ、ヒゲブトハナカミキリ、オオホソコバネカミキリ、
 ヒゲシロホソコバネカミキリ、マダラゴマフカミキリ、セダカコブヤハズカミキリ、
 ヨコヤマヒゲナガカミキリ、ユリクビナガハムシ、ムツキボシツツハムシ、ウエツキブナハムシ、
 ヒメクロケシツブチョッキリ巨椋池個体群、イッシキガガンボモドキ、ヒウラシリアゲ、
 ニホンアミカモドキ、コガタノミズアブ、ヨスジハネモンアブ、シロスネアブ、ナギサツルギアブ、
 タシマツルギアブ、ゼンズリストクチヒゲアシナガバエ、ハナダカマガリモンハナアブ、
 オオナガハナアブ、ハイイロハナアブ、ヤマシロムネカクトビケラ、
 △ツマグロキチョウ、○ウラギンスジヒョウモン、キョウトニギョウトビケラ、フタスジキソトビケラ、
 ギンイチモンジセセリ、△ギフチョウ、ヒロオビミドリシジミ、イトウハバチ、キゴシジガバチ、
 ○シロスジコシブトハナバチ、スジボソコシブトハナバチ、ルリモンハナバチ、クロマルハナバチ、
 ○ツノヒゲシギアブ、○シバカワツリアブ、○セマダラミギワバエ、○アワウミワライミギワバエ

準絶滅危惧種(69種)

オツネイトンボ、グンバイトンボ、ベニイトンボ、モートンイトンボ、ルリボシヤンマ、
 キイロサナエ、ムカシヤンマ、▽キイロヤマトンボ、ナニワトンボ、ミヤマアカネ、ハッチョウトンボ、
 イソカネタタキ、ヒメカマキリ、カスリウスバカゲロウ、マダラウスバカゲロウ、
 エゾハルゼミ、コオイムシ、ネグロクサアブ、
 ○ニセクチグロヒラタアブ、イトウタマユラアブ、キスネハラキンミズアブ、ハマダラナガレアブ、
 ○ヒラヤマミズアブ、○クロトゲミギワバエ、イノウシアブ、ホソムシヒキ、トラフムシヒキ、
 ガロアアナキハナアブ、○マエグロシギアブ、○ヤマトクチブトメバエ、クロハナブトハナアブ、
 ハチモドキハナアブ、ルリハナアブ、スイドウトビケラ、○クロハラナガハナアブ、
 ハナナガモモブトコハナアブ、クロアシナガハナアブ、ツマグロキチョウ、
 オナガシジミ、クロシジミ、オオヒカゲ、クロヒカゲモドキ、ウラナミジャノメ、スジボソヤマキチョウ、
 キマダラルリツバメ、ウラナミアカシジミ、ウラジロミドリシジミ、オオムラサキ、
 ○ヒメキマダラヒカゲ、エゾスジヨトウ、ハナセヒラクチハバチ、シロズヒラタハバチ、
 アオスジベッコウ、フタモンベッコウ、マイマイツツハナバチ、ヤマトヌスミベッコウ、フクイアナバチ、
 アカオビケラトリバチ、フクイジガバチモドキ、ガロアギングチバチ、カゲロウギングチバチ、
 ヤマトスナハキバチ、キアシハナダカバチモドキ、ニッポンツヤバチ、トラマルハナバチ、
 クズハキリバチ、▽スギハラクモバチ(スギハラベッコウ)、○ハナダカバチ

要注目種(198種)

オオトゲエラカゲロウ、オオシロカゲロウ、イマニシマダラカゲロウ、チノマダラカゲロウ、
 キハダヒラタカゲロウ、ムナグロキハダヒラタカゲロウ、○セスジイトンボ、○オオイトンボ、
 ○ムスジイトンボ、○カトリヤンマ、○ヒラサナエ、○ヒメサナエ、○タバサナエ、○オグマサナエ、
 ○コサナエ、○フタスジサナエ、○ミヤマサナエ、○オオサカサナエ、○メガネサナエ、

○マイコアカネ、キョウトゴキブリ、ツチゴキブリ、カマキリ、ヒナカマキリ、ウスバカマキリ、
 コバネコロギス、イブキヒメギス、ヒサゴクサキリ、ヘリグロツユムシ、ヒメヤブキリモドキ、
 ハダカササキリモドキ、ホンシュウフタエササキリモドキ、マツムシモドキ、ウミコオロギ(ナギサズ)、
 ウスモンウミコオロギ、コガタカンタン、クチキコオロギ、ケラ、○ミヤマフキバツタ種群、クルマバツタ、
 ショウリョウバツタモドキ、アカエゾゼミ、ルリクチブトカMEMシ、リュウキュウホシウスバカゲロウ、
 ポンポンメクラチビゴミムシ、ヨウロウメクラチビゴミムシ、キョウトメクラチビゴミムシ、
 タンゴメクラチビゴミムシ、オオエヤマヌレチビゴミムシ、ヒロムネナガゴミムシ、ダイヒザンナガゴミムシ、
 キョウトオオナガゴミムシ、キョウトナガゴミムシ、ダイセンナガゴミムシ、タカバクロヒラタゴミムシ、
 ヒメセボシヒラタゴミムシ、オグラヒラタゴミムシ、タナカツヤゴモク、アオバネホソクビゴミムシ、
 カンムリセスジゲンゴロウ、オオミズスマシ、ガムシ、○アシナガオオキバハネカクシ、
 キョウトコチビシデムシ、マダラクワガタ、キンキコルリクワガタ、
 オオチャイロハナムグリ、▽オオムツボシタママシ、コガタヒメサビキコリ、ハマベオオヒメサビキコリ、
 ツシマヒメサビキコリ、フタモンウバタマコメツキ、クロフトヒラタコメツキ、コガタシモフリコメツキ、
 コガネコメツキ、タンバコクロコメツキ、ウスカバイロコメツキ、チャイロムナボソコメツキ、
 ヒラタクシコメツキ、ヤマモトツヤミズギワコメツキ、ヨツボシミズギワコメツキ、
 キョウトチビマメコメツキ、ニホンチビマメコメツキ、ニセニホンチビマメコメツキ、ゲンジボタル、
 ヘイケボタル、ヒメボタル、カンサイニンフジョウカイ、
 アカオビカツオブシムシ、ケプトヒラタキクイムシ、ケモンセスジシバンムシ、
 ▽ヨツモンチビカッコウムシ、ヤマトヒメメダカカッコウ、ルリホシカムシ、▽ツツヒラタムシ、
 オオキノコムシ、カタモンナガチビオオキノコムシ、クロスジチャイロテントウ、クチキオオハナノミ、
 ヤマトオサムシダマシ、▽クロキノコゴミムシダマシ、マルツヤニジゴミムシダマシ、
 コメノゴミムシダマシ、シワナガキマワリ、ハネナシセスジキマワリ、ヘリハネムシ、
 ケブカマルクビカミキリ、ニッポンモモフトコバネカミキリ、ヨツボシカミキリ、フトキクスイモドキカミキリ、
 トゲムネホソヒゲカミキリ、ピクチビコブカミキリ、チャバネホソリンゴカミキリ、
 キュウシュウチビトラカミキリ、キイロミヤマカミキリ、オガサワラチャイロカミキリ、
 アカネキスジトラカミキリ、ムネアカメダカカミキリ、
 クロオビキノコヒゲナガゾウムシ、ピロードアシナガオトシブミ、キベリハムシ、コブルリオトシブミ、
 ホソミツギリゾウムシ、チャバネホソミツギリゾウムシ、アカオニミツギリゾウムシ、ケシチビゾウムシ、
 サビマルクチゾウムシ、タカハシトゲゾウムシ、クロアシナガゾウムシ、スナムグリヒョウタンゾウムシ、
 アオヒゲナガゾウムシ、ミカドガガンボ、カネノクモガタガガンボ、トワダオオカ、ハマダラハルカ、
 ケジロキアブ、ヒメキイロコウカアブ、アシグルルリミズアブ、ミズアブ、ハラビロミズアブ、
 ○ミドロミズアブ、キアシキンシギアブ、ヤマグチハネモンアブ(ヤマグチメクラアブ)、
 タケウチセダカコガシラアブ、クロバネツリアブ、オオイシアブ、トゲツヤシアブ、
 ツマグロヒゲボソムシヒキ、ハマベコムシヒキ、アオメアブ、ニッコウクロハナアブ、プサロクロハナアブ、
 キョウトハナアブ、クロオビハナアブ、ジョウザンナガハナアブ、フタオビアリノスアブ、
 オオハチモドキバエ、ハマベニクバエ、コマバムツボシヒラタアブ、○アエカヨコモンヒラタアブ、
 ○ニノミヤトビクチミギワバエ、○ヤマトミギワバエ、○ラカンミギワバエ、ニッポンクダトビケラ、
 ヒガシヤマクダトビケラ、ミヤコクダトビケラ、キブネクダトビケラ、ニッポンイワトビケラ、
 コガタシマトビケラ、キブネシマトビケラ、クレメンスナガレトビケラ、カワムラナガレトビケラ、
 クラマナガレトビケラ、トランスクィラナガレトビケラ、ヨシイナガレトビケラ、ナガレトビケラ属の1種、
 ヤセコヤマトビケラ、
 イノプスヤマトビケラ、ハナセマルツツトビケラ、キョウトコエグリトビケラ、クロツツトビケラ、
 コカクツツトビケラ、カタツムリトビケラ、ツダヒゲナガトビケラ、カモヒゲナガトビケラ、
 ミヤコヒゲナガトビケラ、タテヒゲナガトビケラ属の1種、セトトビケラ属の1種、ヒメセトトビケラ、
 ハマゴウノメイガ、イノウエトガリメイガ、○ギンツバメ、ワタナベカレハ、○オオシモフリスズメ、
 ○キマダラコヤガ、タツカモクメシャチホコ、ガマヨトウ、ニセフジロアツバ、▽トモンハナバチ

〈 クモ類 10種 〉

絶滅危惧種(5種)

イソコモリグモ、ミズグモ、カネコタテグモ、ヒトエグモ、ドウシグモ

準絶滅危惧種(3種)

ワスレナグモ、キシノウエトタテグモ、キノボリタテグモ

要注目種(2種)

○コガタコノハグモ、○アシュウヤミサラグモ

凡 例

- | |
|------------|
| △:アップリスト種 |
| ▽:ダウンリスト種 |
| ○:新規掲載された種 |
| ☆:種名などの変更 |

甲殻類およびその他の淡水産無脊椎動物

1. 改訂版レッドリスト

〈 甲殻類およびその他の淡水産無脊椎動物 6種 〉

絶滅種(1種)

△カンテンコケムシ

絶滅危惧種(1種)

△ヌマエビ

準絶滅危惧種(2種)

ナリタヨコエビ、○チスイビル

要注目種(2種)

▽モクズガニ、○ミナミヌマエビ

凡 例

- | |
|------------|
| △:アップリスト種 |
| ▽:ダウンリスト種 |
| ○:新規掲載された種 |
| ☆:種名などの変更 |

1 レッドリスト見直しで明らかになった点

京都府自然環境目録 2002 には陸産貝類が 112 種(亜種を含む)掲載されていたが、既存の標本資料からハマシノミガイが、桂離宮の調査によって国内外来種のウスイロオカチグサが確認された。今回の見直しでは、これら 114 種から外来種 6 種(国内外来種を含む)を除いた 108 種が評価対象となった。

レッドリストに掲載された種の総数は、前回(2002年)では 42 種だったが、今回は 44 種となり、2 種増加した。前回よりランクアップしたのは 11 種で、石灰洞周辺や島嶼など特殊な環境に生息している種とシカの食害による林床植生の変化の影響を受ける種がほとんどであった。ランクダウンした種はなかったが、新規に 2 種が選定された。

絶滅寸前種には、前回の絶滅危惧種から 3 種がランクアップした結果、4 種となった。一方、絶滅危惧種は準絶滅危惧種から 1 種がランクアップし、差し引きで前回の 10 種から 8 種に減少した。準絶滅危惧種は要注目種から 7 種がランクアップし、また新規に 1 種選定されて 16 種に、要注目種も新規に 1 種選定されて 16 種となった。

2 注目される種のカテゴリー(ランク)と変更理由

ニクイロシブキツボ (旧)絶滅危惧種 → (新)絶滅寸前種

秋田県から兵庫県にかけての日本海側の山地に分布し、湧水等で常に水浸しでコケ類が生い茂る岩壁という特殊な環境に極めて局所的に生息する。府下の生息地ではシカの食害による植生の激変を受け、本種が必要とする特殊な水環境が損なわれるおそれがある。こうした状況から、本見直しでは絶滅寸前種に選定した。

トサビロウドマイマイ (旧)準絶滅危惧種 → (新)絶滅危惧種

四国および小豆島、淡路島に分布するほか、京都府下では若狭湾冠島に飛地分布する。かつては生息確認事例が報告されていたが、近年ではほとんど見つからず、かつドブネズミの侵入によって生息環境が悪化しているおそれがある。こうした状況から、本見直しでは絶滅危惧種に選定した。

シリオレトノサマガセル (旧)要注目種 → (新)準絶滅危惧種

潜在的地理的生息域は比較的広いが、既知の生息地は極めて限定されている。府下の生息地では、シカの食害による植生や林床の変化によって生息環境が悪化していると推測されるため、準絶滅危惧種に選定した。

3. 改訂版レッドリスト

〈 陸産貝類 44種 〉

絶滅寸前種(4種)

△ホラアナゴマオカチグサ、△ニクイロシブキツボ、カスガコギセル、△ヒロクチコギセル

絶滅危惧種(8種)

アズキガイ、クリイロキセルガイモドキ(エチゴキセルガイモドキ)、キョウトギセル、
ナガオカモノアラガイ(カンサイオカモノアラガイ)、ココロマイマイ、△トサビロウドマイマイ、
クチマガリマイマイ、ミヤマヒダリマキマイマイ(ヒラヒダリマキマイマイ)

準絶滅危惧種(16種)

△ゴマオカタニシ、キセルガイモドキ、オオギセル(マルテンスギセル)、
△シリオレトノサマギセル、ホソヒメギセル、△オオコウラナメクジ、△ヤマコウラナメクジ、
△カサネシタラガイ、コシタカコベソマイマイ、コベソマイマイ、○ヤマタカマイマイ、
△ケハダビロウドマイマイ、コウベマイマイ、ギュリキマイマイ、ツルガマイマイ、
△イブキクロイワマイマイ(ミノマイマイ)

要注目種(16種)

ヤマクルマガイ、ミヤコムシオイ、ヘソカドガイ、○ハマシイノミガイ、ナタネキバサナギ、
フトキセルガイモドキ、ヒメコギセル、トノサマギセル属の1種、ミヤコベッコウ、
ニシキマイマイおよびナミマイマイ、ミヤコオトメマイマイ、キョウトキビ、キョウトシタラガイ、
マルニッポンマイマイ、コオオベソマイマイ

凡 例

△:アップリスト種
▽:ダウンリスト種
○:新規掲載された種
☆:種名などの変更

1 レッドリスト見直しで明らかになった点

京都府自然環境目録 2002 には淡水貝類が 47 種(亜種を含む)掲載されていたが、既存の標本資料からカワシンジュガイとフネドブガイが、最近の調査からヒメマルタニシとマルドブガイが確認された。今回の見直しでは、これら 51 種から外来種 7 種(国内外来種を含む)を除いた 44 種が評価対象となった。

レッドリストに掲載された種の総数は、前回(2002年)では 18 種だったが、今回は 25 種となり、7 種増加した。前回よりランクアップしたのは 12 種で、ほとんどが琵琶湖・淀川水系の固有種であった。ランクダウンした種はなかったが、7 種が新規に選定された。

前は絶滅寸前種とした 5 種(ナガタニシ・オウミガイ・カワネジガイ・ヒダリマキモノアラガイ・オトコタテボシガイ)は、レッドリスト公表後も新たな情報が得られず、過去 50 年以上の発見記録がないので、今回は絶滅種とした。絶滅寸前種には、前回の絶滅危惧種から 6 種がランクアップしたほか、新規に 3 種が選定され、結果として前回より 4 種増えて 9 種となった。一方、絶滅危惧種は新規に 2 種が選定されたが、差し引きで前回の 9 種から 5 種に減少した。準絶滅危惧種は新規に 2 種選定されて 4 種に、要注目種も新規に 1 種選定されて 2 種となった。

2 注目される種のカテゴリー(ランク)と変更理由

ナカセコカワニナ (旧)絶滅危惧種 → (新)絶滅寸前種

琵琶湖・淀川水系の固有種で、かつては琵琶湖から淀川下流まで分布し、京都府下では 1980 年頃までは疏水と宇治川に生息していた。しかし現在では滋賀県の瀬田川の一部と天瀬ダム下流の宇治川にしか生息せず、しかも分布域の縮小および個体数減少の傾向が見られる。こうした状況から、本見直しでは絶滅寸前種に選定した。

ヤマトカワニナ (旧)リスト外 → (新)絶滅寸前種

ナカセコカワニナと同じく琵琶湖・淀川水系の固有種で、京都府下では疏水と宇治川に生息していた。疏水では増えているという情報があったので、前はリストに入れなかった。しかし、今回の見直しで疏水も宇治川も 1990 年代後半から生息が確認されていないことが明らかになったので、絶滅寸前種に選定した。

カワシンジュガイ (旧)リスト外 → (新)絶滅寸前種

京都府淡水産貝類リストが公表された後に、1983 年に綾部市で採集されていたという情報が寄せられた。地元での聞き取り調査の結果、かつてはかなりの個体数が生息していたことが明らかになったが、最近の生息確認はできなかった。こうした状況から、本見直しでは絶滅寸前種に選定した。

3. 改訂版レッドリスト

〈 淡水産貝類 25種 〉

絶滅種(5種)

△ナガタニシ、△オウミガイ、△カワネジガイ、△ヒダリマキモノアラガイ、△オトコタテボシガイ

絶滅寸前種(9種)

△マメタニシ、○ヤマトカワニナ、○タテヒダカワニナ、△ナカセコカワニナ、
△カドヒラマキガイ、○カワシンジュガイ、△オグラヌマガイ、△イケチョウガイ、△セタシジミ

絶滅危惧種(5種)

△クロダカワニナ、オバエボシガイ、ニセマツカサガイ、カタハガイ、○マシジミ

準絶滅危惧種(4種)

マルタニシ、○オオタニシ、○モノアラガイ、マツカサガイ

要注目種(2種)

サガノミジンツボ、○ヒメマルマメタニシ

凡 例

△:アップリスト種
▽:ダウンリスト種
○:新規掲載された種
☆:種名などの変更

1 レッドリスト見直しで明らかになった点

[1] 絶滅のおそれのある種の総数は、前回レッドリスト(2002年)では557種(要注目種中の外来種を除く)であった。その内訳は、絶滅種62、絶滅寸前種157、絶滅危惧種142、準絶滅危惧種142、要注目種(外来種を除く)54である。今回の見直しでは新たにランク入りしたものが188種、2002年版ではランク内だったが今回はリスト外となったものが6種で、差し引き182種の増加となった。新たにランク入りしたものの内訳は、絶滅寸前種として34種、絶滅危惧種として60種、準絶滅危惧種として59種、要注目種として35種である。絶滅種に相当と考えられるものもいくつかあったが、今回新たに絶滅種としてノミネートすることは控えた。(なお、この内訳で示したものはリスト外から新たにランク入りしたものに限定しており、ランクの上昇や下降に伴うものは含まれていない)。府内の種子植物の評価対象分類群種数の総数は確定していないが、約2,350種とみられるので、総数の約31.4%がノミネートされたことになる。これは全国的に見ても非常に高い数値である(前回は約24.2%)。

[2] 今回多くの種類が新たにノミネートされた理由は、大きく分けて三つある。

1. 前回のレッドリストは初めてのリスト化であったため、膨大な種類数のなかからの精密な選定ができていなかった。とくに先行して出版されていたレッドデータブック近畿との対比が不十分で、今回はその比較から対象種を選び出す作業を精密におこなった。もし2002年の府のレッドリストでこの作業が行われていたなら、ランク入りした種数は総対象種の28%前後になっていたことは確実である。今回リスト入りしたキバナサバノオ(絶滅寸前種)やナガバノウナギツカミ(絶滅危惧種)は、その代表的な例である。
2. 文献調査や現地調査を重点的におこない、府内に産することが新たに確認されたものが多いこと。この中にはハタベカンガレイ(環境省Ⅱ類)やミチノクナシ(環境省ⅠA類)、クモイジガバチ(同)などの希少種が多く含まれ、自動的にランク入りすることになった。
3. 府内では山地を中心にシカの食害が広範囲に進行し、シダ植物ではまだランクレベルでの影響は少ないが、種子植物では甚大な影響をもたらしていること。とりわけ南丹市の美山町芦生など、中部地域で影響が大きい。ただ、園芸上の盗採や遷移の進行などと鹿害との区別は時間がたてば困難になることがあり、はっきりと断定できるものはまだ少ない。レンプクソウなどは2002年のリスト化で準絶滅危惧種だったものが今回では一気に絶滅寸前種にランクアップしたが、これは園芸上の需要がまったくない種類であるため、シカ害によるものと断定できる例である。

2 注目される種のカテゴリー(ランク)と変更理由

クモイジガバチ (旧)リスト外 → (新)絶滅寸前種

本種は前回のレッドリストの対象外であったというより、府内に産することが研究者に気づかれていなかったというのが正しい。環境省指定ⅠA類であり、府内産は当然絶滅寸前種とすべきものである。大木の樹幹に着生する生態があり、一部のラン愛好家には府内産が1960年代から知られていた。自生状況を示す写真も残っている。しかし1970年代を最後に確認が途絶えた。シカの食害が及ばない場所に生育するから、再発見される可能性は残っている。(注: 2013年7月に再発見された)

エイザンスミレ (旧)準絶滅危惧種 → (新)絶滅寸前種

京都の比叡山に因む名がついた本種は、木陰や半陰の草地に生える多年草で、生育には多めの湿度が必要である。近年遷移が進んで消失したり、シカの食害や園芸上の盗採によって減少

が著しい。また、樹林伐採による湿度低下と見られる例もある。比叡山の個体群は、人工増殖を試みる段階に来ているといえる。

ハイチゴザサ (旧)準絶滅危惧種 → (新)リスト外

空中湿度の高い森林地帯の湿りがちの空き地に生える本種は、遷移等によって減少していると前回考えられたが、林道や沢沿いにかかなり残っていることが判明した。多くの場合は群落をつくり、千個体単位で生育している場所も見られる。園芸上の需要はもとより、地面を這うように広がるためシカによる食害もほとんどない。今回の見直しで、レッドリストの基準外のものであると判断された。

3. 改訂版レッドリスト

〈 種子植物 739種 〉

絶滅種(45種)

ニオイタデ、イソホウキギ(イソボウキ)、ハママツナ、レイジンソウ、ヤマオダマキ、バイカモ
エゾフウロ、マツバニンジン、ホタルサイコ、(ウメバチモ)、ムジナモ、エゾエンゴサク、
オオマルバコンロンソウ、ヒメノハギ、カサモチ、ヌマゼリ(サワゼリ)、シロバナウンゼン、
シタキソウ、エゾノヨツバムグラ、シロバナイナモリソウ、オウギカズラ、
キュウシュウコゴメグサ(チュウゴクコゴメグサ)、カミガモソウ、ヒメトラノオ(ヤマトラノオ)、
コタヌキモ、カンボク、マツムシソウ、タカサゴソウ、オオダイトウヒレン、タンバヤブレガサ、
オナモミ、マルバオモダカ、オオミズヒキモ(カモガワモ)、☆ミノコバイモ(?)、ヒメノカンゾウ、
ヤマユリ(エイザンユリ)、ヤマトホシクサ、オニノガリヤス、コメススキ、ウラハグサ(フウチソウ)、
ムカゴツヅリ、マイヅルテンナンショウ、ユキモチソウ(カンキソウ)、アオヒエスゲ、シオクグ、
アツモリソウ、

絶滅寸前種(217種)

アサダ(ミノカブリ)、オオバヤドリギ、サイコクヌカボ、ヌカボタデ、▽ヒキノカサ、
ホソバイヌタデ、マダイオウ、キブネダイオウ、ワチガイソウ、▽ルイヨウショウマ、
エゾハマツメクサ、ホソバハマアカザ、ヤナギイノコヅチ、フクジュソウ、エンコウソウ、
アズマシロカネソウ、サンインシロカネソウ、オキナグサ、オトコゼリ、シギンカラマツ、
マンセンカラマツ、モミジカラマツ、オニバス、オグラコウホネ、ベニバナヤマシャクヤク、
トモエソウ、アゼオトギリ、▽ウマスゲ、イシモチソウ、コモウセンゴケ、トウカイコモウセンゴケ、
ヤマブキソウ、アオベンケイ、ミヤママンネングサ、タコノアシ、ヤシヤビシャク、▽ノビネチドリ、
ミツモトソウ、イヌハギ、ツルフジバカマ、ヨツバハギ、▽チョウジソウ、▽モメンヅル、
▽レンリソウ、▽シオガマギク、▽ツリシュスラン、▽ヒナラン、▽ヒシモドキ、オオバクサフジ、
ハマビシ、ヒナノカンザシ、ミズキカシグサ、ヒメビシ、オグラノフサモ、フサモ、ミシマサイコ、
イブキボウフウ、マルバノイチヤクソウ(オオジンヨウイチヤクソウ)、カラタチバナ、
クロミノサワフタギ、アイナエ、ハルリンドウ、ガガブタ、フナバラソウ、イナモリソウ、ムラサキ、
ミズネコノオ、ミズトラノオ、ヤマジソ、マルバノサワトウガラシ、オオアブノメ、イワギリソウ、
シンシラン、イトタヌキモ(ミカワタヌキモ)、ヒメタヌキモ、タヌキモ、ムラサキミミカキグサ、
オオキンレイカ、カノコソウ(ハルオミナエシ)、チョウジギク(クマギク)、フジバカマ、
アキノハハコグサ、ホソバオグルマ、ノニガナ、メタカラコウ、ホクチアザミ、ミヤコアザミ、
コウリンカ、アオヤギバナ、マルミスブタ、スブタ、ホロムイソウ、コバノヒルムシロ、イトモ、
エビアマモ、ヒロハトリゲモ(サガミトリゲモ)、イトトリゲモ、イバラモ、オオトリゲモ、ホンゴウソウ、
ウエマツソウ、ステゴビル、ヒメコウガイゼキショウ、ヒロハノコウガイゼキショウ、
クロイヌノヒゲ、ヒメユリ、サクライソウ、イワショウブ、ミズアオイ、ヒメシャガ、ヒナノシャクジョウ、

オオホシクサ、ミズタカモジ(ミズタカモジグサ)、コウヤザサ、ヌマカゼクサ、ウンヌケモドキ、
 カモノハシ、コシノネズミガヤ、アオテンナンショウ(誤認?)、ヒメザゼンソウ、ナガエミクリ、
 ヒメミクリ、イトテンツキ、エナシヒゴクサ、タマツリスゲ、
 オオタマツリスゲ(ヒロハノタマツリスゲ、ホソエノムギスゲ)、ヒナスゲ、ヤチカワズスゲ、ヒメスゲ、
 タヌキラン、マメスゲ、オニナルコスゲ、ヒメアオガヤツリ、イガガヤツリ、
 ヌマハリイ(オオヌマハリイ)、アゼテンツキ、トネテンツキ、イトイヌノハナヒゲ、コイヌノハナヒゲ、
 ノグサ、ミカワシンジュガヤ、コシンジュガヤ、ケシンジュガヤ、マネキシシンジュガヤ、ナゴラン、
 シラン、サルメンエビネ、クマガイソウ、サギソウ、ムカゴソウ、ホクリクムヨウラン、ムヨウラン、
 ヒメフタバラン、フウラン、ヨウラクラン、ウチヨウラン、ミズチドリ、ヤマサギソウ、ヤマトキソウ、
 マツラン(ベニカヤラン)、ツレサギソウ、オオヤマサギソウ、クモラン、ハクウンラン、
 △アズマツメクサ、△トラノハナヒゲ、△ミズハナビ、△イワウメヅル、△キセワタ、△キキョウ、
 △ヒメヨモギ、△ヒナザサ、△モミジカラスウリ、○イワテヤマナシ、○カザグルマ、
 ○キバナサバノオ、○マルバウマノスズクサ、○コゴメカゼクサ、○ノハラクサフジ、
 ○ウドカズラ、○マルバスマミレ(ケマルバスマミレも含む)、○ツルタチツボスマミレ○コムラサキ、
 ○ヤマタツナミソウ、○オオマルバノホロシ、○サツキヒナノウスツボ、○キクバヒヨドリ、
 ○タンゴボウキ、○ヌマダイコン、○ハバヤマボクチ、○ヒメシオン、○ヒメタデ、
 ○ツクシカンガレイ、○ハタベカンガレイ、イワチドリ、○キエビネ、○クモイジガバチ、
 ○クロムヨウラン、○ヒナチドリ、○ベニシユスラン、○マヤラン、○ムカゴサイシン、
 △エイザンスミレ、○クロハリイ、○ハマヒルガオ府南部個体群、○カワラハハコ、
 ▽タニジャコウソウ、▽フサタヌキモ、▽ノコギリソウ、▽ラセンソウ、△イタチササゲ、
 △タンゴグミ、△オオバキスマミレ、△レンプクソウ、○キバナアキギリ、○トモエシオガマ、
 ○ヤマトテンナンショウ

絶滅危惧種(222種)

ノグルミ、サクラバハンノキ、ミヤコミズ、ヒノキバヤドリギ、▽アサザ、▽クサレダマ、ヤドリギ、
 アシウテンナンショウ、ヤナギヌカボ、オオヤマハコベ、ハマアカザ、アズマイチゲ、
 セツブンソウ、ミスミソウ(ユキワリソウ)、ヘビノボラズ、☆サイコクヒメコウホネ、ヒメカンアオイ、
 コウヤミズキ(ミヤマトサミズキ)、ツメレンゲ(ヒロハツメレンゲ)、△オオモミジガサ、▽ヌマガヤ、
 ヤマシロネコノメ、ギンバイソウ、オオチャルメルソウ、シモツケソウ、カワラサイコ、○ナニワズ、
 ツルキンバイ、コバナノワレモコウ、シモツケ、バライチゴ、タヌキマメ、クサフジ、コフウロ、
 ビッチュウフウロ、タカトウダイ(ハマタカトウダイを含む)、ヒトツバハギ、ミヤマウメモドキ、
 コツゲ、クロタキカズラ、ヨコグラノキ、カツラギグミ、アケボノスマミレ、エゾミソハギ、ミズマツバ、
 オニビシ、ウシタキソウ、タチモ、カワラボウフウ(シラカワボウフウ、ヤマニンジン)、
 ウメガサソウ、アカモノ、サツキ(サツキツツジ)、ホウライカズラ、イヌセンブリ、スズサイコ、
 ルリミノキ、カギカズラ、アオイゴケ、ジュウニヒトエ、セトエゴマ、イブキジャコウソウ、
 ヤマホオズキ、アオホオズキ、ゴマクサ、サワトウガラシ、キクガラクサ、スズメノハコベ、
 ヒキヨモギ、スズムシバナ、キヨズミウツボ、ノタヌキモ、イヌタヌキモ、ヤマホタルブクロ、
 タイミンガサ、コバナガンクビソウ(バンジンガンクビソウ)、モリアザミ(ゴボウアザミ)、
 ヒメアザミ(ヒメヤマアザミ)、シマカンギク、ヤマジノギク(アレノノギク)、スイラン、オグルマ、
 カセンソウ、ハンカイソウ、ヒメヒゴダイ、キクアザミ、アギナシ、ヤナギスブタ、トチカガミ、
 ミズオオバコ、コウガイモ、アマモ、ギョウジャニンニク(エイザンニンニク)、
 ミズギボウシ(ナガバミズギボウシ)、ハナゼキショウ(イワゼキショウ)、クロホシクサ、
 ミヤマヌカボ、ヤマアワ、ヒメノガリヤス、ヒゲノガリヤス、ヒメアブラススキ、ナルコビエ、
 ヒロハノドジョウツナギ、コウボウ、エゾノサヤヌカグサ、ミヤマネズミガヤ、キダチノネズミガヤ、
 ハマヒエガエリ、ウキシバ、オオアブラススキ、ヒゲシバ、アシウテンナンショウ、
 ヒロハテンナンショウ、ムサシアブミ、ミクリ、▽マキエハギ、ヤマトミクリ、コガマ、

イトハナビテンツキ、ハリガネスゲ、ケタガネソウ、シラコスゲ、ヤブスゲ、オオイトスゲ、
 チャガヤツリ、△ヒロハノオオタマツリスゲ、オオイヌノハナヒゲ、イガクサ、△ギンラン、
 △キンラン、△ジガバチソウ、△トウテイラン、コマツカサススキ、ヒメホタルイ、マツカサススキ、
 △ハマナデシコ、△アラゲナツハゼ、コウキヤガラ(エゾウキヤガラ)、マメヅタラン、ムギラン、
 ナツエビネ、イトスゲ、トケンラン、ミズトンボ、ジンバイソウ、コバノトンボソウ、ヒトツボクロ、
 △セキシヨウモ、ショウキラン、△ヒツジグサ、△ウメバチソウ、△カキノハグサ、△メグスリノキ、
 △アカネスミレ、△イソスミレ、△ヒメミソハギ、△フデリンドウ、△フクオウソウ、
 ○ツルコウゾ、○ナガバノウナギツカミ、○タチハコベ、○ヤマハコベ、
 ○オオバウマノスズクサ、○ヤマシャクヤク、○コイヌガラシ、○ムラサキマユミ、○カラスノゴマ、
 ○コミヤマスマレ、○ヤマゼリ、○シャクジョウソウ、○エゾリンドウ、
 ○コバノカモメヅル(アズマ、シロバナを含む)、○サワリソウ、○ホタルカズラ、
 ○イヌノフグリ、○エゾシロネ、○マネキグサ、○ミヤマナミキ、△オケラ、○アブノメ、
 ○クチナシグサ、○シソクサ、○エゾゴマナ、○オカオグルマ、○キクタニギク、
 ○ホソバノヤマハハコ、○ヤマザトタンポポ、○ツツイトモ、○トリゲモ、○ノカンゾウ、
 ○サトヤマハリスゲ、○シズイ、○セイタカハリイ、○ヒメカンガレイ、○フトイ、
 ○ホザキマスキサ、○ミカツキグサ、○ミノボロスゲ、○クロヤツシロラン、○コケイラン、
 ○トキソウ、○ユウシュンラン、△オニシバ、△クガイソウ、△アヤメ、○オオキヌタソウ、
 ○ヤマジノタツナミソウ、○ヒナスミレ、○サギスゲ、○グレーンスゲ、△キバナノアマナ、
 △スズメノコビエ、▽セキコク、○キヌヤナギ、○ネバリタデ、
 ○オオネバリタデ、○ナカバノスミレサイシン、○マルバノホロシ、○オオヒナノウスツボ、
 ○カシワバハグマ、○ヒナノウスツボ、○ヤマトウミヒルモ、○コアマモ、○キンダマムシグサ、

準絶滅危惧種(180種)

ミズメ、カシワ、キミズ、マツグミ、オオイタドリ、コブシ、▽クリンソウ、マツブサ、
 ユキワリイチゲ(ウラベニイチゲ)、キクザキイチゲ(キクザキイチリンソウ)、クサボタン、
 トリガタハンショウヅル、トウゴクサバノオ、ルイヨウボタン、コウモリカズラ、ミズオトギリ、
 キケマン、ヒロハノコンロンソウ、ミズタガラシ、イヌナズナ、ユリワサビ、ミツバベンケイ、
 コガネネコノメソウ、ジンジソウ、ハルユキノシタ、ヤマブキシヨウマ、ズミ(コリンゴ、コナシ)、
 オオウラジロノキ、ツルキジムシロ、ハマナス、ヤマイバラ、フジキ、ミソナオシ、
 サイカチ(カワラフジノキ)、エビラフジ、ノウルシ、ドクウツギ(イチロベゴロシ)、ミツデカエデ、
 カジカエデ(オニモミジ)、ヒナウチワカエデ、コショウノキ、カラスシキミ、キガンピ(キコガンピ)、
 コショウショウジョウバカマ(シロバナショウジョウバカマ)、イワギボウシ、イヌミゾハコベ、
 ホザキノフサモ(キンギョモ)、ケヤマウコギ(オニウコギ)、ミヤマウコギ、ハナビゼリ、ドクゼリ、
 セリモドキ(タニセリモドキ)、ムカゴニンジン、カノツメソウ(ダケゼリ)、ヒカゲミツバ、
 サラサドウダン、ベニドウダン、コケリンドウ、カリガネソウ、クマツヅラ、
 ミゾコウジュ(ユキミソウ)、ナミキソウ、ハシリドコロ、コシオガマ、オオヒキヨモギ、
 オオナンバンギセル、ホザキノミミカキグサ、ナベナ、サワギキョウ、△サツマイナモリ、
 △オミナエシ、△エチゴツルキジムシロ、△ナンテンハギ、△ヤマフジ、△レンゲツツジ、
 △スナビキソウ、△タジマタムラソウ、△イソギク、△サワシロギク、△ヤマカシウ、
 マルバサンキライ、ナツズイセン、ヒオウギ、ノハナショウブ、カキツバタ、ハナビゼキシヨウ、
 オガルカヤ、スズメガヤ、オオニワホコリ、ムツオレグサ(ミノゴメ)、マンゴクドジョウツナギ、
 ウシノシッペイ、ハリコウガイゼキシヨウ、アシカキ、イブキヌカボ、アイアシ、イヌアワ、
 オオハンゲ、コウキクサ、オニスゲ(ミクリスゲ)、タニガワスゲ、
 ヤマアゼスゲ(ヒロハノタニガワスゲ)、アオバスゲ、ヤガミスゲ、ホシナシゴウソ、ヌカスゲ、
 ミコシガヤ、ヒメゴウソ(アオゴウソ)、コカンスゲ、アオガヤツリ(オオタマガヤツリ)、シカクイ、
 ノテンツキ(ヒラテンツキ)、イヌノハナヒゲ、ウキヤガラ、タイワンヤマイ、オニノヤガラ、

アケボノシュスラン、カヤラン、○コバノチョウセンエノキ、○カナビキソウ、○サデクサ、
 ○タンナトリカブト、○オオズミ、○マルバヌスビトハギ、○エゾタチカタバミ、○クロウメモドキ、
 ○コガンピ、○フモトスマレ、○リュウキュウマメガキ、○ヤマトアオダモ、○タチカモメヅル、
 ○オヤマムグラ、○イガタツナミソウ、○カワミドリ、○ジャコウソウ、○ナツノタムラソウ、
 ○フトボナギナタコウジュ、○フジウツギ、○ウンラン、○カワヂシャ、○ハマウツボ、
 ○ミミカキグサ、○コウグイスカグラ、○ソバナ、○ワカサハマギク、○ウリカワ、○ヘラオモダカ、
 ○シライトソウ、○ツクバネソウ、○ユウスゲ、○ヒメコヌカグサ、○ミノボロ、○ウラシマソウ、
 ○カンサイイワスゲ、○シロガヤツリ、○ナガミノショウジョウスゲ、○ビロードテンツキ、
 ○ヒンジガヤツリ、○ハナミョウガ、○ウマノスズクサ、○キリンソウ、○ケテイカカズラ、
 ○オギノツメ、○ヒヨクソウ、○ユキザサ、○ヒゴスマレ、○ツチアケビ、○クルマバハグマ、
 ○カキラン、△イワボタン、○イヌショウマ、○ヒカゲツツジ、○ギンレイカ(ミヤマタゴボウ)、
 ○シソバタツナミ、○ハッカ、○ホクリクタツナミソウ、○オヒガンギボウシ、○ウシクサ、
 ▽チシマネコノメソウ、オニシバリ、

要注目種(75種)

ウバメガシ、ケグワ、ヒメシャラ、▽ミズユキノシタ、▽メガルカヤ、▽エビネ、▽コクラン、
 ヒュウガミズキ、ボタンネコノメソウ、マルバウツギ、ナニワイバラ、ミツバイワガサ(タンゴイワガサ)、
 ユキヤナギ、ハマナタマメ、ニワフジ(イワフジ)、☆カラメドハギ、フユザンショウ、エゾイタヤ、
 ヤマブドウ、ウラジロハナヒリノキ(コシノハナヒリノキ)、リンドウ、センブリ、ミツガシワ、キジョラン、
 グンバイヒルガオ、ナンバンギセル、オオヨモギ(ヤマヨモギ)、ミツバヒヨドリ、
 ニッコウキスゲ(ゼンテイカ)、コヤブラン(リュウキュウヤブラン)、ノシラン、バイケイソウ、ホシクサ、
 トキワススキ、シバ、キノクニスゲ(キシユウスゲ)、ノゲヌカスゲ、オオクグ、フサナキリスゲ、
 タシロラン、○サラシナショウマ、○シラヒゲソウ、○ヨサノハゴロモナナカマド、
 ○オオイタヤメイゲツ、○ホソパイラクサ、○サトヤマタデ、○ヒメクロモジ、
 ○イブキトリカブト(キタヤマブシ)、○キカラスウリ、○ハクウンボク、○テンニンソウ、
 ○エゾノキツネアザミ、○オカダイコン、○オクモミジハグマ、○オヒルムシロ、○アサツキ、
 ○シロウマアサツキ、○オオキツネノカミソリ、○オオシロガヤツリ、○クロアブラガヤ、
 ○サンカクイ、○ツルナシコアゼガヤツリ、○ヒトモトススキ、○ビロードスゲ、○マツバスゲ、
 ○アキザキヤツシロラン、○スズムシソウ、○イカリソウ、○クロモ、○ネコノシタ、
 ○タマガワホトギス、○ヤマジスゲ、○エゾカワラナデシコ、○モミジチャルメルソウ、
 ○リュウノヒゲモ

凡 例

△:アップリスト種
▽:ダウンリスト種
○:新規掲載された種
☆:種名などの変更

シダ植物

1 レッドリスト見直しで明らかになった点

[1] 絶滅のおそれのある種の総数は、前回のレッドリスト(2002)では絶滅 5 種、絶滅寸前 27 種、絶滅危惧 30 種、準絶滅危惧種 13、要注目種 33 の計 108 種だったが、今回は 11 種増えた。その内訳は、以下のとおりである。

新規にレッドリストに加わった種

種名	カテゴリー	追加された理由
ミズニラモドキ	絶滅寸前種	前回は暫定的にミズニラに含めた
トネハナヤスリ	絶滅寸前種	府内で新規に発見された希少種
エゾフユノハナワラビ	絶滅寸前種	府内で新規に発見された希少種
ヌカイトチシダマガイ	絶滅寸前種	府内で新規に発見された希少種
ミドリワラビ	絶滅寸前種	府内で新規に発見された希少種
ヒメクラマゴケ	絶滅危惧種	工事や遷移で著しく減少した
ナチシダ	絶滅危惧種	府内で新規に発見され園芸需要も
モトマチハナワラビ	絶滅寸前種	府内で新規に発見された希少種
タチクラマゴケ	要注目種	工事や遷移で著しく減少した
クジャクフモトシダ	要注目種	新規に発見されたが、自生か不明
イシカグマ	要注目種	新規に発見されたが、自生か不明

また、カテゴリーが変更されたものは以下の 8 種である。

カテゴリーが変更された種

種名	変更前と変更後	変更された理由
オオアカウキクサ	絶滅危惧種→絶滅寸前種	外来種(雑種アゾラ)との競合で著しく減
サクライカグマ	要注目種→絶滅寸前種	40年以上再発見されていない
ムクゲシケシダ	要注目種→絶滅寸前種	典型品が丹後で発見された
マンネンスギ	要注目→絶滅危惧	遷移進行による著しい減少
マツザカシダ	要注目→準絶滅危惧	自生が確定したが、園芸需要も
イヌチャセンシダ	要注目→準絶滅危惧	湿度の低下により産地が減少
ミヤコカナワラビ	要注目→準絶滅危惧	シカの食害で大群落が消失
アツギノヌカイトチシダマガイ	絶滅寸前→絶滅危惧	新たな産地が複数発見された

2013 年 3 月現在府内産として確認されたシダ植物の種数は、品種や外来、逸出および不稔性雑種を除いて 253 分類群なので、A) 準絶滅危惧種以上のランクでは 33.6 %が対象種として選定されたことになる(前回は 30.0 %)。B) 絶滅種と準絶滅危惧種以下を除けば、25.3 %である(前回は 22.7 %)。

[2] 絶滅のおそれのある種の総数が微増した理由は、A) 調査による(超)希少種の発見 B) 工事や遷移による個体数や群落数の減少が大きい。シカの食害による影響もかなり大きいですが、シダ植物では産地消滅までいたった事例はまだ少ない。

[3] 今回の見直しで唯一ランクが下がったアツギノヌカイトチシダマガイは、近年福知山市周辺で複数の産地が確認され、個体数は少ないものの園芸上の需要に乏しいものであることを考慮した結果である。本来たいへんな希少種で、兵庫県では絶滅危惧 A ランクに指定されているが、岩場に自生するためシカの食害を免れていることが多いのも、ランク変更にあたって考慮された。

2 注目される種のカテゴリー(ランク)と変更理由

ヌカイタチシダマガイ (旧)リスト外 → (新)絶滅寸前種

アツギノヌカイタチシダマガイ(前回レッドリストで絶滅寸前種)の学名上の母種にあたるものであるが、前回レッドリストの段階では府内未発見であった。今回の調査で福知山市内に二か所の産地があることが判明した。全国レベルでも希少なもので、産する県ではほとんどのところで指定されている。岩場に着生するものであるためシカの食害を免れているが、乾燥化が進んで一部枯死したものも見受けられた。個体数は二か所併せて 20 以下であるため、絶滅寸前種に該当すると判断した。

オオアカウキクサ (旧)絶滅危惧種 → (新)絶滅寸前種

前回レッドリストの段階では府内における雑種アゾラの定着状況ははっきりしていなかったが、この十年の間に爆発的に増加し、いまでは山間部の池や田にやや普通に見られるようになった。オオアカウキクサの生育地に入り込んだところも見られる。オオアカウキクサは暑さに弱く、夏場は休眠状になる。しかし雑種アゾラは寒暑に強く、夏場も旺盛に生長するため、夏の終わりにオオアカウキクサが成長する余地もないほど繁ってしまい、それが原因でオオアカウキクサが確認できなくなったところが目立つようになってきた。

ミヤコカナワラビ (旧)要注目種 → (新)準絶滅危惧種

未記載の分類群であるが、海岸部が主体のホソバカナワラビとは異なって内陸部の極相林やスギ林下に見られるものである。根茎で繁殖するため、しばしば群落をつくる。これまで個体数が多いと判断されたため要注目種どまりだったが、近年シカの食害が著しく増え、松尾大社社叢にあった大群落は跡かたもなく消滅した。今後このような事例が増えてくるものと予想される。

3. 改訂版レッドリスト

〈 シダ植物 119種 〉

絶滅種(5種)

オクタマシダ、ミドリカナワラビ、イヨクジャク、オオクボシダ、イワオモダカ

絶滅寸前種(34種)

マツバラシダ、ヤチスギラン、ミズニラ、アカウキクサ、サンショウモ、ハマハナヤスリ、
ヒロハハナヤスリ、ナガボノナツノハナワラビ、デンジソウ、ヒメムカゴシダ、ホウビシダ、
クモノスシダ、アオガネシダ、ヌカイタチシダモドキ、オニイノデ、△オオアカウキクサ、
△サクライカグマ、テバコワラビ、トゲカラクサイヌワラビ、ハコネシケチシダ、△ムクゲシケシダ、
コウライイヌワラビモドキ、イワヤシダ、ヒカゲワラビ、コガネシダ、フクロシダ、クラガリシダ、
イワヤナギシダ、アオネカズラ、△ミズニラモドキ、○エゾフユノハナワラビ、
○ヌカイタチシダマガイ、○ミドリワラビ、○トネハナヤスリ、

絶滅危惧種(33種)

▽アツギノヌカイタチシダマガイ、スギラン、ヒモカズラ、イワヒバ、コヒロハハナヤスリ、
コハナヤスリ、アカハナワラビ、キヨスミコケシノブ、コケシノブ、オウレンシダ、ハコネシダ、
ナカミシシラン、アマクサシダ、トキワトラノオ、クルマシダ、ヒロハヤブソテツ、ミヤコヤブソテツ、
タカサゴシダ、ヌカイタチシダ、キョズミオオクジャク、イワイタチシダ、ミヤコイヌワラビ、
ナガエイヌワラビ、ヤクイヌワラビ近似品、フモトシケシダ、シマシロヤマシダ、
ウスバミヤマノコギリシダ、イワデンダ、ホテイシダ、ビロードシダ、△マンネンズギ、
○ヒメクラマゴケ、○ナチシダ

準絶滅危惧種(17種)

ナツノハナワラビ、ヤシャゼンマイ、カミガモシダ、カンムリベニシダ、△マツザカシダ、
タニヘゴ、イワハリガネワラビ、ルリデライヌワラビ、オオヒメワラビモドキ、オニヒカゲワラビ、
ミヤマシダ、ヒメサジラン、ヤノネシダ、カラクサシダ、○アカフユノハナワラビ、
△ミヤコカナワラビ、△イヌチャセンシダ、

要注目種(30種)

オニトウゲシバ、ヤマドリゼンマイ、タカサゴキジノオ、ヒメハイホラゴケ、ヒメコケシノブ、ミズワラビ、
シモツケヌリトラノオ、オサシダ、コモチシダ、ホソバナライシダ、コバノカナワラビ、○イシカグマ、
ヤブソテツモドキ、ハチジョウベニシダ、ナチクジャク、シラネワラビ、ワカナシダ、
ナガバノイタチシダ、ハコネオオクジャク、イノウエシダ、ツルデンダ、ヒトツバジュウモンジシダ、
アオハリガネワラビ(シロジクハリガネワラビ)、オオバショリマ、トガリバイヌワラビ、
サキモリイヌワラビ、タンゴワラビ、ミヤマノキシノブ、○タチクラマゴケ、○クジャクフモトシダ

凡 例

- | |
|------------|
| △:アップリスト種 |
| ▽:ダウンリスト種 |
| ○:新規掲載された種 |
| ☆:種名などの変更 |

1 レッドリスト見直しで明らかになった点

自然公園等の生育環境が良好に保全されている場所からは、絶滅寸前種(例: 蘚類ハリミズゴケ, コシノヤバネゴケ, 苔類:アカヤバネゴケ), 前回調査で未確認であった種(例: 蘚類イトヒバゴケ)これまで京都府あるいは近畿からは知られていなかった種(例: 蘚類:ホウライサワゴケ, 苔類:イトウロコゴケ)が見いだされたことは、京都府のコケ植物フロアの多様性を示すものであると考えられる。その一方、初報告以来再び発見されていない種があり、これらについては今回絶滅と判断した。踏みつけあるいは乾燥化によると考えられるシモフリゴケ以外の種では自然林等の生育環境が開発によって失われたことが原因と想定され、このことは今後の保全活動について考慮されるべきであろう。また温暖化に伴うシカの増加により下層植生の著しい減少により、たとえばコシノヤバネゴケなど京都府を西限とする稀少種の存続が脅かされる現象が確認されており、直接には食害を受けにくいコケ植物においても憂慮される事態となりつつあることは特記されるべきである。

2 注目される種のカテゴリー(ランク)と変更理由

シモフリゴケ (旧)絶滅寸前種 → (新)絶滅種

前回の調査ではわずかに生育するのを確認していたが、今回複数回の調査でも見いだすことができなかった。生育場所は直射日光のさす岩場であることから、近年の乾燥化あるいは登山者増加による踏みつけによって絶滅したものと考えられる。本来高所に生育する本種が、とりたてて特徴のない低地にみつかるとは生物地理学的に興味深いことであっただけに惜まれる。

キブネゴケ (旧)絶滅寸前種 → (新)絶滅種

キブネゴケは京都貴船のサクラの幹から得られた標本に基づき新属新種として報告された種である。その後アジアから報告されていた別属の元に分類されたが、日本を代表する固有種である。これまで30年以上にわたり現地で探索が行われているが現地周辺では再発見にいたらず、今回絶滅と判定された。

イトウロコゴケ (旧)リスト外 → (新)要注目種

2006年に白神山地(秋田県)で採集された標本に基づいて新種記載された苔類。これまでに秋田県以外では青森県、栃木県、東京都伊豆諸島、そして遠く離れた鹿児島県屋久島から見つかっており、今回京都府からの見いだされたことは、本種における分布の空白を埋めるものである。(参考文献 : 秋山弘之 2012 蘚苔類研究 10 (7): 221-222)

3. 改訂版レッドリスト

〈コケ植物 139種〉

絶滅種(4種)

△シモフリゴケ、△ゴレツミズゴケ、△キブネゴケ、△リスゴケ

絶滅寸前種(44種)

(蘚類)ハリミズゴケ、コアナミズゴケ、クマノチョウジゴケ、ジョウレンホウオウゴケ、イヨススキゴケ、ナミカワスナゴケ、コアミメギボウシゴケ、タチチョウチンゴケ、エビゴケ、

チャボサヤゴケ、コシノヤバネゴケ、イトヒバゴケ、トガリイタチゴケ、オオミミゴケ、イトゴケ、
 △ケサガリゴケ、キヌヒバゴケ、タカネメリンスゴケ、ヤクシマツガゴケ、ヒメウスグロゴケ、
 アオモリカギハイゴケ(ササオカゴケ)、コウヤハイゴケ、オオヒラツボゴケ、
 △ヤリノホゴケ、○バンダイゴケ、
 (苔類)クチキハイゴケ、タマキチリメンゴケ、コマノハイゴケ、エゾヤバネゴケ、
 エゾヒメヤバネゴケ、ケスジヤバネゴケ、アカヤバネゴケ、ヤハズツボミゴケ、ヒメツボミゴケ、
 フォウリイイチョウゴケ、キヒシヤクゴケ、コモチハネゴケ、ヒラケビラゴケ、エゾノケビラゴケ、
 ケクラマゴケモドキ、ヨウジョウゴケ、カギヨウジョウゴケ、カビゴケ、タカネシゲリゴケ

絶滅危惧種(46種)

(蘚類)ホソバミズゴケ、チヂレタチゴケ、ウチワチョウジゴケ、マイマイゴケ(ヤマトマイマイゴケ)、
 アラハシラガゴケ、イワマセンボンゴケ、トウヨウチョウチンゴケ(オオヤマチョウチンゴケ)、
 ヤマトチョウチンゴケ、ナガクビサワゴケ、サワゴケ(マキバサワゴケ)、オオサワゴケ、
 エゾサワゴケ、オウミゴケ、ナガミノゴケ、ムジナゴケ、キノクニキヌタゴケ、カトウゴケ、
 ▽コタチヒダゴケ、ヒロハシノブイトゴケ、モロハヒラゴケ、
 イバラゴケ(ケムシゴケ)、コキジノオゴケ、ヒメソテツゴケ、ヤマトソリハゴケ、
 キノクニオカムラゴケ、イトヤナギゴケ(タチヤナギゴケ)、ネジレイトゴケ、ヒラハクシノハゴケ、
 ヤマハイゴケ、コフサゴケ、▽コウライイチイゴケ
 (苔類)キリシマゴケ、フタバムチゴケ、アイバゴケ、オヤコゴケ、フサアイバゴケ、
 オオヒシヤクゴケ、トゲハヒシヤクゴケ、ヤマトソコマメゴケ、チチブハネゴケ、ヨコグラハネゴケ、
 オオシタバケビラゴケ、カハルクラマゴケモドキ、カゴシマヤスデゴケ、オニヤスデゴケ、
 ナンヨウサンカクゴケ

準絶滅危惧種(36種)

(蘚類)ホソベリミズゴケ、クマノゴケ、キュウシュウホウオウゴケ、チャイロホウオウゴケ、
 ナガバヒョウタンゴケ、カタハマキゴケ、ヤマトハクチョウゴケ、シナチヂレゴケ、アカスジゴケ、
 オオカサゴケ、ハツトリチョウチンゴケ、フロウソウ、コウヤノマンネングサ、イタチゴケ、
 マツムラゴケ、コハイヒモゴケ、ナガスジイトゴケ、ミヤマハイゴケ、
 (苔類)ヤマトムチゴケ、ホラゴケモドキ、ミヤマホラゴケモドキ、マルバヤバネゴケ、
 キブリツボミゴケ、マルバコオイゴケモドキ、ナカジマトサカゴケ、ヒメハネゴケ、
 マルバクラマゴケモドキ、オンタケヤスデゴケ、タラダケヤスデゴケ、シコクヤスデゴケ、
 ヤマトクサリゴケ、▽ウキゴケ、ヤマトサンカクゴケ、イボヨウジョウゴケ、モミジスジゴケ、
 ミヤケハタケゴケ、

要注目種(8種)

(蘚類)○オタルミスゴケ、○ホウライサワゴケ、○オオミズゴケ
 (苔類)ヤマトツノゴケモドキ、イチョウウキゴケ、ヤワラゼニゴケ、○イトウロコゴケ、○ウロコゼニゴケ

凡 例

△	:アップリスト種
▽	:ダウンリスト種
○	:新規掲載された種
☆	:種名などの変更

1 レッドリスト見直しで明らかになった点

- [1] 菌類レッドリストは改めて過去の採集記録を精査し、希少種・あるいは減少しつつある環境の菌類を抽出し、また分類学的に課題にある菌群については見直しを行った。
- [2] アカマツ林の減少に伴い、かつての松茸山に見られたキノコを掲載した。府下全域を通し、貧栄養のマツ林という環境は希少になっている。
- [3] 菌類は調査が未だ不十分な部分があり、新産記録の時点で絶滅危惧とせざるを得ない物も多い。廃村八丁の湿原に発生したヤチヒロヒダタケを掲載した。同種は青森、尾瀬湿原などで採集記録のある湿原性のキノコである。府下では、幼菌が採取され、この他にもブンゴツボマツタケ、スッポンヤドリタケなど京都府新産でありながら絶滅危惧種としたものがある。
- [4] モミ・ツガ林の菌類を指定した。これらの樹種とのみ共生する菌根菌も多く生態系の要となっている一方、府下には十分に保全され安定した林分は少ないためである。

2 注目される種のカテゴリー(ランク)と変更理由

アカイカタケ (旧)絶滅 → (新)絶滅寸前種

岩倉・北山などで再発見された。近年大阪などでも発見採集が相次いでいる。発生条件の難しい稀産種であり、目立つ形態のわりには情報が少ないことから絶滅寸前種にとどめた。

ブンゴツボマツタケ(仮称) (旧)リスト外 → (新)絶滅寸前種

国内二例目として京都御苑で採集され、その後継続的な発生が見られている。生態の詳細は不明だが、テングタケ属の菌への寄生が疑われている。外生菌根性のテングタケ属の共生者となる樹木を含め、発生条件の人工的整備は困難である。

3. 改訂版レッドリスト

〈 菌類 95種 〉

絶滅種(3種)

タマノリイグチ、キイロスッポンタケ、ウスキキヌガサタケ

絶滅寸前種(30種)

キタマゴタケ、クロヒメオニタケ、マグソヒトヨタケ、○ブンゴツボマツタケ、ツガノマンネンタケ、アミメニセショウロ、ウロコケシボウズタケ、○ナガエノホコリタケ、カゴタケ、ヨツデタケ、イモタケ、イカタケ、シマイヌノエフデ、ショウロ、ホンショウロ、コニシセミタケ、セミタケ、ウメムラセミタケ、トビシマセミタケ、ウンカハリタケ、マイヅルヨコバイタケ、テッポウムシタケ、マイヅルナガエムシタケ、オサムシタケ、ハトミネクモタケ、シロツブクロクモタケ、▽コウボウフデ、▽アカイカタケ、○ヤチヒロヒダタケ、○ミドリトサカタケ

絶滅危惧種(5種)

○バカマツタケ、○マコハキタケ、△オオミノミミブサタケ、○タンポヤンマタケ、○スッポンヤドリタケ

準絶滅危惧種(27種)

マツタケ、マツタケモドキ、ホンシメジ、○キシメジ、○シモコシ、○チャオニテングタケ、ショウゲンジ、アカモミタケ、ハツタケ、ウスタケ、スジチャダイゴケ、オオノウタケ、○ニンギョウタケモドキ、○ヒメウグイスイグチ、○ミミブサタケ、クラガタノボリリュウ、アブラゼミタケ、ツクツクボウシタケ、○ルリハツタケ、○フジウスタケ、トガリスズメバチタケ、マルミアリタケ、ヤンマタケ、アカミノオグラクモタケ、○コトヒラシロテングタケ、○クロカワ、○コウタケ

要注目種(27種)

▽シバフダンゴタケ、▽キンチャクタケ、サザレイシタケ、○ケロウジ、○ミヤマタマゴタケ、シロツブタケ、コイシタケ、イロガワリクログツブタケ、ツチダンゴ、▽ジマメタケ、ツネノアミガサタケ、○キイロクビオレタケ、▽チャセイヨウショウロ、▽ウスチャセイヨウショウロ、▽クルミタケモドキ、▽ウツロイモタケ、○イロガワリヤマイグチ、カブラテングタケ、▽マメツブタケ、○アカダマタケ、○ブナシメジ、▽シロセイヨウショウロ、▽クロアミメセイヨウショウロ、カバイロコナテングタケ、○マツカサチャワンタケ、○テンガイカブリタケ、○エツキクロコップタケ

凡 例

- | |
|------------|
| △:アップリスト種 |
| ▽:ダウンリスト種 |
| ○:新規掲載された種 |
| ☆:種名などの変更 |